



これからの建築家を考える 歴史から現在をとらえて

- JIA 建築家大会 2025 千葉
- JIA 建築家大会 2024 別府レポート
- 常任幹事会からの報告
- 金曜の会 トークイベント
- アーバントリップ100回記念シンポジウム
- 覗いてみました他人の流儀
- 卒業設計をふりかえる
- わたしの師
- 海外レポート
- 溶けた石 —鉄筋コンクリート建築の考古学— 第4回
- Meaningful Garden —意味に満ちた庭— 第8回
- 弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第11回
- 温故知新
- 活動報告
- 学生の会@joint 活動報告

Bulletin



ドアハンドルを通して ものづくりの伝承と発展を目指す

株式会社ユニオンは、1958(昭和33)年にドアハンドル専門メーカーとして大阪市で創業。住宅やホテル、商業施設、病院などさまざまな建物に採用され、ドアハンドルの国内シェアはトップを誇ります。ドアハンドル以外にも、建築部材の金物を、建物の用途やシーンに合わせて数多くのラインナップを用意。大阪をはじめ東京、名古屋にも営業拠点を置き、1980年代からは海外市場にも進出して挑戦を続けています。

立野純三社長に製品開発にける思いと、今後の取り組みについてうかがいました。

ユニオン=ドアハンドルを確立

当社はドアハンドル専門のメーカーとしてスタートし、現在は国内外に向けて建築金物の開発と製造、販売をしています。大きな転機となったのが1964年の東京オリンピックと1970年の日本万国博覧会でした。オリンピックに向けた建設ラッシュ時には、競技施設や新幹線の駅舎のドアハンドルに、万博では全てのパビリオンに当社のドアハンドルを採用いただきました。この経験からブランド力に自信と信頼を得て事業が拡大し、ユニオン=ドアハンドルというイメージを持ついただけるようになりました。

時代のニーズに即した製品づくり

製品開発は社内のデザイン担当約10名を中心に、ファッションなどの流行を参考にしながら、デザインから材質、色、仕上げなどを決めていきます。最近はやや新素材が出てこないため、色や仕上げをブラッシュアップして新たな製品をつくることもあります。

ドアハンドルは手に触れるものなので、触ったときに違和感がないことと、怪我の心配のない安全なものであることにも気を付けています。

最近では、価格の高騰もあり真鍮を扱うことが少なくなってきました。今は仕上りの色だけでOKと判断されがちですが、真鍮などの経年変化する素材の良さもあると思います。皆さんにはぜひ本物を長く使っていただきたいです。



真鍮鑄物のカスタムハンドルの事例。設計士の想いを形にし、経年美化を愉しむ

また、近年は海外向けに、日本の伝統工芸である南部鉄や漆、有田焼をハンドルに取り入れた製品も展開しています。当社の製品は以前から海外で仕上がりなどを評価していただいていますので、今後は今以上に認めて使ってもらえるように注力していきたいです。

建築家と製品を開発する

採用いただく建物の設計者と、その建物に合ったハンドルを一緒に開発する機会も多く、それをカタログに載せて既製品化するケースもあります。

建築家の皆様には、できるだけ難しいデザインや仕上げをぜひご注文いただきたいと思っています。もちろんカタログから選んでいただくことが非常にありがたいのですが、一方で、製造してくれている工場の職人の技術を守

り、伝承していくことも重要だと考えています。ぜひ一緒にものづくりに挑戦していただけると嬉しいです。そのためにも、建築家の皆さんにきちんとご提案できる、コンサルができる営業マンを育てていきたいです。

大阪万博で未来のハンドルを展示

私が社長として大事にしているものはファミリーです。やはり家族の支援がなくては働けませんから、家族にユニオンがどんな会社か知ってもらうことを大切にしています。社員全員で力を合わせて会社を継続していきたいと思っています。

今年のおおさか・くわんせい万博では当社が開発した非接触のドアハンドルシステムと、発電する引き戸を展示します。来場された際はぜひご覧ください。

UNION 株式会社ユニオン

<https://www.artunion.co.jp>

ドアハンドルやレバーハンドル、消火器ケースなど、建設環境金属製品の製造・販売を行う。

本社・大阪支店 〒550-0015 大阪市西区南堀江2-13-22 TEL:06-6532-3731
東京支店 〒135-0021 東京都江東区白河2-9-5 TEL:03-3630-2811
名古屋営業所 〒454-0805 名古屋市中川区舟戸町3-20 TEL:052-363-5221

■東京支店1F「東京ショールーム」へぜひお立ち寄りください。



東京ショールーム

目次

● 特集

4 これからの建築家を考える
歴史から現在をとらえて

モダニズム建築は何を求めたのか

神奈川大学 松隈 洋

● ひろば

- 8 JIA 建築家大会 2025 千葉 開催地決定経緯と開催概要 千葉大学 鈴木弘樹
- 10 JIA 建築家大会 2024 別府 参加レポート 中村高淑建築設計事務所 中村高淑 / 日本大学大学院 伊藤綾香 / 東京大学大学院 井筒悠斗 / 東京電機大学 高橋花穂 / 日本大学 池田耕一郎 / 早稲田大学 辻本雄一郎
- 12 常任幹事会からの報告 JIA 建築家大会 2025 千葉 開催で JIA を考えよう 大宇根建築設計事務所 渡邊大海
- 13 支部活動紹介 金曜の会 坂田涼太郎氏トークイベント「構造のダイナミズムを求めて」 ihrmk 井原正揮
- 14 アーバントリップ実行委員会 アーバントリップ100回記念シンポジウム studioacca 赤川鉄哉 / 大川建築都市設計研究所 大川直治 / 山下設計 芝本敏彦 / 楠山設計 南 知之
- 16 覗いてみました他人の流儀 山田能資氏に聞く 伊達冠石を通してその内面を視つめる Bulletin 編集 WG
- 18 卒業設計をふりかえる コミュニケーションの舞台をつなげる 佐藤総合計画 銚岩 崇
- 19 わたしの師 Pater familias 小川真樹建築総合計画 小川真樹
- 20 海外レポート ウィーンでの生活と建築設計事務所での働き方 —オーストリアのスタンダード— MHM Architects 鈴木 実
- 22 溶けた石 —鉄筋コンクリート建築の考古学— 第4回 鉄筋コンクリートのオリジナリティ —オーギュスト・ペレー— 後藤武建築設計事務所 後藤 武
- 24 Meaningful Garden ~意味に満ちた庭~ 第8回 「建築」の伝え方 アイダアトリエ 会田友朗
- 25 弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第11回 地盤調査不足による設計上の問題について 榎本・藤本・安藤総合法律事務所 安藤 亮
- 26 温故知新 先達に学ぶ 大海原に小舟で漕ぎ出す 彦根建築設計事務所 彦根 明
- 27 抱負を語る 「時間」と「空間」の再構築 芝浦工業大学 志村秀明
- 抱負を語る モノをつくり、コトをつくる 繁田尊友建築設計事務所 繁田尊友
- 28 活動報告 交流委員会 Aグループ 建物見学会 —キュービー「マヨテラス」を見学— 東洋テクノ 平山智恵
- 29 交流委員会 Fグループ 施設見学会と懇親会を開催 —体験型ショールーム「PS モンスーン」— ビーエス工業 有本健彦
- 30 学生の会 @joint 活動報告 「JIA 公開エスキス会」を開催しました！ 東京大学大学院 井筒悠斗

● あとがき

- 31 ひといき スキー同好会 平原設計事務所 平原 茂
- 支部総務委員会からのお知らせ / 編集後記
- 2 パートナーズアイ 株式会社ユニオン ドアハンドルを通してものづくりの伝承と発展を目指す

表紙写真：左 学生の会@joint「JIA公開エスキス会」の様子

中 「SILVER WING」設計：彦根明

右 第8回国際建築家会議で再会したル・コルビュジエと前川國男、1951年7月（前川建築設計事務所蔵）

歴史から現在をとらえて

モダニズム建築は何を求めたのか



神奈川大学教授・建築史研究者
松隈 洋

今年2025年は、敗戦後80年、昭和100年、阪神・淡路大震災から30年という節目の年となる。建築界に目を転ずれば、前川國男(1905～86年)の生誕120年、ル・コルビュジエ(1887～1965年)の没後60年にもあたる。一方で、昨年2024年は、ル・コルビュジエと直接会話を交わし、自著の巻頭に「モダニズム」は「私にとって、建築家としての設計活動の原点であり、基盤でもある^(注1)」と書き留めた槇文彦が6月6日に95歳で、1962年に准教授の槇が教えていた留学先のハーバード大学デザイン大学院(GSD)の製図室で出会い、兄のように慕って60年余りの交友を重ねた谷口吉生が12月16日に87歳で相継いで亡くなり、時代の移り変わりを実感させる年となった。ちなみに、槇と谷口がハーバード大学で学んだのは、草創期のル・コルビュジエのアトリエで、「第1エキップ(作業班)^(注2)」と彼が呼んだ最初のチームの同僚として前川國男と出会い、長く親交のあったスペイン出身の建築家ホセ・ルイ・セルト(1902～83年)[写真1]である。彼は、1939年にGSDの前任者でドイツの造形学校バウハウスの創設者だったヴァルター・グロピウス(1883～1969年)に招かれて渡米し、槇が入学した1953年からアーバン・デザインを教えていた。また、セルトは、2年前の1951

年に、前川と丹下健三、吉阪隆正が参加してロンドンで開催された国際建築家会議(CIAM)第8回大会[写真2]で、「都市のコア」をテーマに議長を務め、現代都市が見失っている人びとの拠りどころとなる広場的な公共空間の必要性を訴えていた。GSDでは、他にも、ル・コルビュジエやグロピウスと共にCIAMの創設メンバーだった建築史家のジークフリート・ギーディオン(1888～1968年)が教えており、谷口は彼の講義を受講し、グロピウスの事務所にもアルバイトで通っていた^(注3)という。そうした意味からも、槇文彦と谷口吉生は、文字通り、戦後のアメリカでモダニズム建築の先駆者たちに直接学び、直系の正統派として世界的に活躍した最後の日本人建築家であった。二人の死は、モダニズム建築の日本における生きられた歴史の終焉を意味する。と同時に、モダニズム建築は何を求めたのか、その再検証が必要な時代となったと言えるだろう。

「作品」と「非作品」の狭間で

さて、そのような中で、2024年、彼らに続く現役世代で、ル・コルビュジエに今も心を寄せる伊東豊雄(1941



[写真1] 前川國男とホセ・ルイ・セルト(右端)、ル・コルビュジエのアトリエにて、1929年頃(前川建築設計事務所蔵)



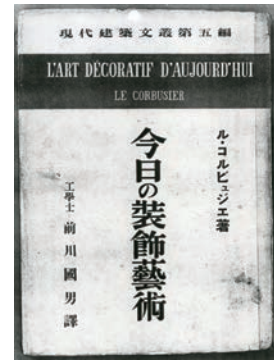
[写真2] 第8回国際建築家会議で再会したル・コルビュジエと前川國男、1951年7月(前川建築設計事務所蔵)



[写真3] ル・コルビュジェ「国立西洋美術館」1959年(1999年撮影/筆者)



[写真4]『建築をめざして』原本
Le Corbusier, *Vers une architecture*,
Nouvelle éd. revue et augmentée,
G. Crès, Collection de "L'Esprit
nouveau", Paris, 1924.
(京都工芸繊維大学図書館所蔵)



[写真5] ル・コルビュジェ著、前川國男訳
『今日の装飾芸術』構成社書房、1930年

年～)は、2023年秋に竣工した「茨木市文化・子育て複合施設おにクル」の掲載誌に寄せた文章の中で、次のように書き留めていた。

「「みんなの家」は、「作品」としての建築と、「非作品」としての建築について考える契機となりました。つまり大震災後の緊急事態において、私が長年こだわってきた「作品」としての建築はどのような意味を持つのだろうかという問題です。突きつめれば「建築を一体誰のために、何のためにつくるのか」という問題です。これは決して私だけではなく、大方の建築家に突きつけられる問題^(注4)であるはずです。」

「みんなの家」とは、注にあるように、「2011年東日本大震災の後、仮設住宅団地の中などを中心に被災者が話し合いや食事をするためのコミュニティのための家」として、伊東が発案者となって計画された小さな公共施設であり、反響を呼んだ。三陸地方に16棟、熊本県内に126棟が建てられたという。だが、この文章からは、建築家という職能に対する自省的な思いが読み取れる。それは、自然災害により住まいを失った多くの被災者が身を寄せた仮設住宅の間に、自らの「作品」としてではなく、匿名性を持つ「非作品」をつくる際に、否応なく気づかされたことなのか、伊東は、続けて、次のように問いかけたのだ。

「多くの建築家は、メディアのために、言い換えれば建築家のために建築をつくっている、と言えるのではないのでしょうか。」

伊東がこう問いかけずにいられなかった背景に何があるのだろうか。また、「作品」と「非作品」という分けを

どう捉えたら良いのか。顕在化したのは、この文章の表題の「誰のために、何のために建築をつくるのか」という問いに含まれていること、すなわち、建築家という職能が持つ社会的な使命に対する自信の揺らぎであり、建築が社会的な信頼を失っている状況への危惧なのだと思う。そのことを再考する糸口はしたら見つけれられるのか。ここでは、歴史の針を巻き戻して、ル・コルビュジェらが切り拓いた20世紀のモダニズム建築の始まりにあったものとは何かについて考えてみたい。

『建築をめざして』の結語に込められていたこと

2016年7月17日、ユネスコは、ル・コルビュジェが唯一日本で手がけた東京上野の国立西洋美術館(1959年)[写真3]を含む世界7カ国に点在する17件を、一括して世界文化遺産に登録することを決議した。この発表によって、彼の名と西洋美術館への関心が高まったに違いない。けれども、注目したいのは、その根拠とされた「近代建築運動(Modern Movement)への顕著な貢献をした」という文言だ。評価を受けたのは、建築の「作品」的な価値ではなく、近代建築「運動」への貢献であり、そこにこそ、モダニズム建築が切り拓いた歴史的な意味が含意されているのだと思う。そして、彼が求めたものをより正確に知ろうとするとき、1923年、ル・コルビュジェが、「住宅は住むための機械である」という有名なメッセージを収録した初めての著書『建築をめざして』[写真4]の結語に記した、「建築か、革命かである。革命は避けられる^(注5)」という言葉に着目する必要がある。

ル・コルビュジェは、なぜこのような謎めいた結語を書き留めたのか。そこには、建築を独学で学び、建築家を志した彼の初心とも言える切実な思いがあったに違いない。スイスに生まれ、30歳を迎える1917年にパリに

出て、さまざまな仕事で食いつないでいた彼は、同年に起きたロシア革命や、史上初の総力戦となった第一次世界大戦(1914～19年)を目撃する。目の前では戦争や都市への人口集中による大量の住宅不足が起きて貧富の差が広がり、人々は劣悪な生活環境に苦しんでいた。そんな時代に、彼は、血を流すことが避けられない革命や戦争ではなく、建築による社会変革を志し、この著書のタイトルどおり、建築をめざそうとしたのだ。また、だからこそ、第一次大戦下の1914年、ベルギーとフランス北部にまたがるフランドル地方の住宅不足の現状を前に、「ドミノ」と呼んだ建築の工業化による「自由な平面」と「自由な立面」が可能な鉄筋コンクリート構造による概念図を考案したのである。1926年、そんなル・コルビュジエの著書に触れて強い影響を受けた前川國男は、後年、彼に学びたいと思った動機について、次のように振り返っている。

「彼の著書は建築の設計とはどうやってやるものか五里霧中で迷っていた学生の私にとって文字通り闇夜の灯であった。

『…青年達にとって大都会はその扉にとぎされて、人はそのなかにフォークの響きを耳にしながらも空しく飢に死なねばならぬ沙漠であった…』

『今日の装飾芸術』[写真5]の巻末に誌されたル・コルビュジエ半生の「告白」を諳んじる程読み返した私はついに矢も盾もたまらなくなって1928年3月31日卒業式の夜、東京を発ってシベリヤの荒野をパリにはしった。^(注6)

この回想からも、ル・コルビュジエが見つめていたパリの街の姿が浮かび上がってくる。そして、前川は、彼のアトリエで、最小限住宅案の作成を担当することになる。そこには、形骸化し、劣悪な生活環境に対応できなくなった旧来の様式建築に代わり、量産化と工業化によって簡素ながらも機能的で快適な住まいや建築を実現し、何よりも人びとの日常的な生活環境を再編成しようとする共通の目標があった。

長い建築の歴史の蓄積の中からエッセンスを発見する

さらに、ル・コルビュジエが1929年に語った次の言葉も、彼の建築思想と方法を理解する上で、大きな手がかりを与えてくれる。

「人は私を革命家と決め付けます。ここで告白いたしますが、私は今までに唯一の師しか持ったことがないのです。過去という師です。そして唯一の教育しか受けたことがありません。過去から学び取るということです。^(注7)

今でも過去をすべて否定してまったく新しい建築を目指した「革命家」と言われる彼は、生前からそれを強く否定していた。また、独学で学んだからこそ、長い建築の歴史の蓄積の中から、変わることにないエッセンスを引き出し、それを明晰な形で再編成する方法論を発見できたのだ。しかも、彼が見ていたのは、モニュメンタルな建築ではなく、無名の民家や集落であったことが、1955年11月の来日時に、ル・コルビュジエに同行した吉阪隆正が書き留めた次の文章からも読み取れる。

「彼には有名なものであるとか、皆がよいとしているとかいうことは一向に念頭にない。現代に生きているもの、将来も皆がその中で生活できるもの、そういうものであれば、乞食小屋であろうと、路傍の草であろうと一生懸命に拾って歩く。(…)『私がほんとうに建築のことを知ったのは、アクロポリスに於てではなく、あの周辺にある名もない民家を尋ね歩いたときである』という彼の言は、如何にも彼らしい。^(注8)

そして、ル・コルビュジエがモダニズム建築によって実現させようとした「最終目的」は、1935年、ニューヨーク近代美術館に招かれて初めて訪れたアメリカで語ったように、「単なる有用性を越えること」であり、「機械文明に生きる人間に心の健康と喜びを与えること」にあつた。^(注9) また、前川が、1969年に記した次の言葉からも、ル・コルビュジエの掲げた近代建築の使命を引き継ごうとする意志を読み取ることができる。

「近代建築の本道は、建築家の個性的な精神によって検証されたところの、ひとつの「原型」としての建築を創造することであつたはずなんです。つまり、近代社会が生み出すマス状況(人口や、人間の活動、生産物などが都市に集中し、大量化するような社会の状況)に対応しなければならないという、社会的な関心が底辺にあつたわけです。「原型」であればこそ、近代建築は当然、社会性と普遍妥当性をもって

いたはずなんです。(注10)」

こう指摘された、「社会性」と「普遍妥当性」を持ち、誰もが共有して発展させることのできる「原型」をつくり出すことに近代建築の「本道」があるとの認識は、どこで見失われてしまったのか。モダニズム建築の出発点に共有されていたものは何だったのだろう。

モダニズム建築の初心と掲げた共通の目標とは何か

私見では、それは、工業化社会において、人々の暮らしを支える「生活空間」をどう組み立て直すのか、という問題設定であり、背景には、産業革命以降に顕在化した、近代都市が抱え込んだ生活環境の劣悪化や戦争や自然災害による住宅不足という深刻な社会問題があった。それに対して、急速に発展しつつあった建設技術を推進力に、建築を根本から組み立て直そうとする共通の意志が育まれていく。この時、彼らが手がかりにしたのが、近代以前にそれぞれの気候風土の中で培われてきた土着的な無名の建築(ヴァナキュラー)が持つ簡素な造形だった。モダニズム建築「運動」の核心にあったのは、建築とは人間にとってどのような存在なのか、という根源的な問いであり、住まいや建築が人の生活を庇護し、命をつなぐためにあるという原点に立ち返ろうとする思想運動だったのだと思う。そう考えるとき、現代建築に求められるのは、人びとのよりどころとなる身近な場所の再構築であり、「公共性」を育む「共有地」の創造へとつながる日常的な生活空間への眼差しではないか。それは、政治学者バーバーが指摘する次のような目標へ向かうものでなければならないだろう。

「市民社会には〈私たち〉の場所があるべきである。それは、真に私たちのための場所であり、私たちが共有しているもののためであり、共有の中で私たちが育っていく場所である。その場所は民主的でなければならない。(注11)」

先ごろ新聞で報道されたが、「子どもがひとりでも安心して行ける無料または低額の食堂」である子ども食堂が、全国で1万カ所を超えたという。このことに象徴されるように、私たちの目の前には、自然災害や格差拡大により、安心して暮らす住まいや、抛りどころとなる場所を持たずに苦しんでいる大勢の人びとがいる。その一方

で、巨額を投じた大阪万博が開催され、明治神宮外苑に象徴されるように、巨大な都市開発は止まらず、全国各地で建築祭と呼ばれる建築ツアーが盛んに行われている。こうした中で、建築家は自らの「作品」づくりに集中し、建築史研究者は「建築祭」の解説者としてタレント化しつつある。このような現実を直視しない建築界が、どうして社会的な信頼を得ることができようか。

1937年、ル・コルビュジエが、「建築とは？ 身を護る場を作ることです。誰のために？ 人間のためにです。」「衰弱し、金銭によって腐敗させられたわれわれの社会に必要なのは、各人の心の底に+（プラス）を書き入れることだ。それで十分であり、それがすべてだ。それは希望である。(注13)」と呼びかけ、太平洋戦争下の1942年、前川國男が、「われらの造形理念出生の揺籃はわれらをとるかこむ全環境なのである。バラックをつくる人はバラックをつくりながら、工場をつくる人は工場をつくりながら、ただ誠実に全環境に目を注げ」と問いかけたように、モダニズム建築の出発点にあった、生活環境に対する責任と誇りを持つ、建築家という職能への自覚が求められている。

〈注〉

- 1: 横文彦『記憶の形象』ちくま学芸文庫、1997年、p.32
- 2: 前川國男「第1巻によせて」『ル・コルビュジエ全作品集』第1巻、A.D.A. EDITA Tokyo Co.,Ltd.、1979年
- 3: 谷口吉生『私の履歴書』淡交社、2019年、「谷口吉生 インタビュー： 不断の交流と友情」『建築と都市a+u』2024年10月臨時増刊『横文彦 言葉と場所』
- 4: 伊東豊雄「誰のために、何のために建築をつくるのか」『新建築』2024年7月号
- 5: ル・コルビュジエ著、吉阪隆正訳『建築をめざして』鹿島出版会SD選書、1967年
- 6: 前川國男「まえがき」ル・コルビュジエ著、生田勉・樋口清訳『伽藍が白かったとき』岩波書店、1957年／岩波文庫、2007年
- 7: ル・コルビュジエ著、井田安弘・芝優子訳『プレジジョン(上)』鹿島出版会SD選書、1984年、pp.62-63
- 8: 吉阪隆正「ル・コルビュジエ来日す」『建築雑誌』1955年12月号
- 9: 注6に同じ。岩波文庫、p.73
- 10: 前川國男「ビルの建設・都市計画—建築家—」、松田道雄編『君たちを活かす職業』筑摩書房、1969年
- 11: ベンジャミン・R・バーバー著、山口晃訳『〈私たち〉の場所—消費社会から市民社会をとりもどす』慶應義塾大学出版会、2007年
- 12: 「子ども食堂 育まれ1万カ所」『朝日新聞』2024年12月12日、湯浅誠「つながり続ける こども食堂」中央公論新社、2021年
- 13: 注6に同じ。岩波文庫、p.302、pp.322-323
- 14: 前川國男「覚え書」『建築雑誌』1942年12月号

JIA 建築家大会 2025 千葉

大会テーマ「せんのちから」

—開催地決定経緯と開催概要—



JIA 建築家大会
2025 千葉
実行委員長
鈴木弘樹

「JIA 建築家大会 2025 千葉」を、2025年11月7日(金)、8日(土)の2日間で実施します。今までの経緯とその開催概要を説明します。

千葉に決定した経緯と今までの活動

JIA 建築家大会は、全国10支部が持ち回りで年1回全国の会員が集まり、地域も連携して行う全国大会です。毎年楽しみにされている会員も多いと思います。全国大会は、過去には本部が主催していた時期もありましたが、現在は支部大会に本部が相乗りする形で実施されています。

JIA 建築家大会 2024 別府の次は、関東甲信越支部での実施が理事会で決定され、候補地の検討をしました。新型コロナウイルス感染拡大前の支部大会は、群馬県で行われ、今回は千葉県で実施が検討されていましたが、新型コロナウイルス感染拡大期間中は実施できず、今回 JIA 建築家大会 2025 が実施されることから、千葉地域会に開催受け入れを相談しました。また、千葉県は国内でも比較的の交通の便が良いこと、海外からの来賓の方々も成田空港などからアクセスしやすいこともあり、千葉県で開催することとしました。

千葉県のどこで開催するかを千葉地域会と協議しました。候補地は、千葉市(文化の森・亥鼻地区)、千葉市(幕張)、成田市、佐倉市、香取市(佐原)などが挙げられ、メイン会場、レセプション会場、宿泊者のホテル等の規模、交通機関等の利便性などを総合的に判断し、千葉市(文化の森・亥鼻地区)に決定しました。さらには、大会に多くの市民や建築を学ぶ学生が参加しやすい場所であることも決定の大きな要因でした。

また、コンパクトで持続可能な大会を目指すことから、今回の大会の大きな特徴は、大会開催日を3日間から2日間に変更したことです。その内容は、正式プログラムで行う2日間は、式典・レセプションパーティー・多種多様なテーマの20シンポジウムを行い、JIA 会員と多くの市民や建築を学ぶ学生が参加しやすい大会のプログラムとしています。例年行われるウェルカムパーティーとエクスカージョンは実行委員会が開催する正式プログラ

ムには組み込まず、有志が集まる形で開催する方式を考えています。例えば、エクスカージョンは、例年地域会で行っている見学会や街歩きなどを11月9日(日)に実施するなどのアイデアが出ています。地域会には市民の方も通常参加しているので、そのイベントを連携して開催することにより、大会の新しい形の一つになることを期待しています。

以下に今までの主な活動を時系列で示します。

●これまでの主な動き

2024年1月25日	千葉地域会に全国大会受入の打診
2024年3月12日	JIA 理事会で2025年JIA全国大会を関東甲信越支部(千葉県)で実施することを承認
2024年4月24日	全国大会千葉地域会WG(第1回)開催。現在に至る(第9回)
2024年4月24日	支部役員会で全国大会の実行委員会発足を承認
2024年6月15日	実行委員会(第1回)で「JIA 建築家大会2025千葉」を正式名称として決定。現在に至る(第7回)
2024年6月21日	企画部会(第1回)開催。現在に至る(第6回)
2024年7月29日	2024年度第1回委員長・地域サミット合同会議で「JIA 建築家大会2025千葉開催にむけて」を開催
2024年10月19日	千葉県文化会館視察参加(主催:千葉県建築設計6団体協議会同千葉県建築文化研究会)
2024年11月28日~30日	JIA 建築家大会2024別府視察
2024年12月14日	千葉大学医学部亥鼻キャンパス 見学会参加(主催:日本建築学会千葉支所)

2024年12月31日現在

開催概要

「JIA 建築家大会 2025 千葉」の開催概要を説明します。

今回の大会テーマは「せんのちから」としました。「せんのちから」は、副題に示すように「多様性を尊重し繋がりを生み出す、社会と建築のあり方」を会員の皆さんや市民・学生と語り合う大会を目指すために、あえてひらがなとし、さまざまな意味を持たせました。「せん」は、千葉の「せん」、先代(過去)の「せん」、先(未来)の「せん」、先端の「せん」、専門の「せん」、建築家が大切にしている線の「せん」などであり、「ちから」は、力の「ちから」、地からの「ちから」、知から「ちから」などにかけた言葉です。「多様性を尊重し繋がりを生み出す、社会と建築のあり方」の実現の一歩となる大会を皆さんと目指したいと思っています。

大会実行組織

大会実行組織は、執行部と4つの部会で構成し準備を進めています。力強い行動力で迅速に判断し進める必要があるため、初期のメンバーは適任と思われる方々を最少人数で構成し、部会長などの判断で、増員する形の組織運営としています。今後、大会当日の会場運営などで、地域会や委員会、法人協力会員の方々にご協力いただくことになると思いますので、よろしくお願いいたします。



千葉県文化会館と千葉文化の森 (撮影：安達文宏)

JIA 建築家大会 2025 千葉 大会概要

テーマ 「**せんのちから**」

副題 多様性を尊重し繋がりを生み出す、社会と建築のあり方について

開催日 2025年11月7日(金)・11月8日(土)

会場 千葉県文化会館(メイン会場)、千葉大学 むのはな同窓会館

●開催趣旨

今、私たちの身のまわりには、温暖化といった地球規模の課題から、超高齢社会や人口減少、大都市の膨張と消滅可能性都市、食料自給率の低迷と貧困など、様々な問題が溢れています。それゆえ地域や社会の存続が危ぶまれており、そこには建築や地域も深くかかわっています。このような状況に対応し、〈持続性をもつ好ましい社会〉を実現するためには、幅広い分野にわたる多様な知見・職能・技術の融合が欠かせません。2025年秋、国際建築家連合(UIA)に日本を代表して加盟している公益社団法人日本建築家協会(JIA)は、JIA建築家大会2025千葉を開催します。〈持続性をもつ好ましい社会〉を構想し、実践している、建築家・技術者・行政・運営者・市民・学生など100名が発表をし、これからの建築や地域についてともに考える1,000人会議を行います。現代社会は多様な価値・考え・立場が共存することで成り立っています。個々の尊重と社会の全体像は矛盾しますが、多様な個が相補的に繋がるのが、〈持続性をもつ好ましい社会〉の基盤となるのではないでしょうか。立場や分野を越えた多様な職能を持つ幅広い分野の方々との協働がいま求められており、そうした議論をする場を提供します。

主催：日本建築家協会 関東甲信越支部

運営：日本建築家協会 関東甲信越支部 大会実行委員会

●実行組織

大会統括 渡邊太海(関東甲信越支部長)
大会委員長 栗生 明(元JIA副会長、千葉大学名誉教授)
大会顧問 慶野正司(前関東甲信越支部長)
上浪 寛(元関東甲信越支部長)
森 暢郎(前JIA副会長)
明智克夫(元千葉地域会代表)
実行委員会 委員長 鈴木弘樹(関東甲信越副支部長)
副委員長 上垣内伸一(前副支部長)
鹿田健一朗(前幹事長)
水越英一郎(副幹事長)
森田敬介(千葉地域会代表)

部会

●企画部会

テーマから全体プログラムを検討する組織
部会長 今村創平(千葉工業大学)
委員 水越英一郎

●運営部会

企画部会と連携、イベントも含むプログラム等を実施する組織
部会長 大山早嗣(関東甲信越副支部長)
委員 森田敬介、葦楽友美(国際委員会)、安達文宏(千葉地域会)

●広報部会

HP、パンフレット等の企画・作成により広報を行う組織
部会長 会田友朗(幹事長)
委員 田端友康(千葉地域会)、磯野智由(千葉地域会)、
関本竜太(広報委員会)、佐久間達也(広報委員会)

●財務部会

協賛金調整と資金管理を行う組織
部会長 上垣内伸一
副部会長 大草徹也(三菱地所設計)
委員 河野剛陽(交流委員長)、相野谷誠志(交流副委員長)、渡邊顕彦(交流委員)

2024年11月28日(木)、29日(金)、30日(土)に大分県別府市で開催された「JIA 建築家大会2024 別府」の参加レポートをお届けします。

全国大会に参加して

— 別府で見た「未来」と「地獄」 —



たかよし
中村高淑

2024年11月28日より3日間、大分県別府市にて「JIA 建築家大会2024 別府」が開催されました。メイン会場である別府国際コンベンションセンター「ビーコンプラザ」は大分出身の建築家・故磯崎新氏の設計によるもの。『建築の未来』をテーマにさまざまな展示やシンポジウム、会議、パーティー、エクスカージョンなどのイベントが行われました。大会参加とともに、別府の美しい風景に加え、日本屈指の温泉と温泉街の情緒や地獄めぐりなどの観光を楽しみました。私目線での大会参加報告です。

11月28日 大会初日



メイン会場の別府国際コンベンションセンター「ビーコンプラザ」(設計:磯崎新)。エントランスホールにて「まちと建築展」、エントランスホール吹抜の会場でもちづくりワークショップ「まち歩き 別府の「たから」と「あら」を考え、提案しよう!」が開催。会場入口にて同日開催「注目の若手建築家による建築討論」登壇者、畑友洋氏と再会(あかりコンペTF新井今日子氏と共に)。

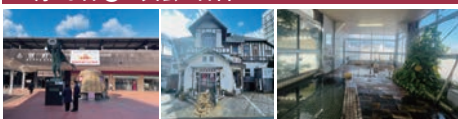


「第15回 建築家のあかりコンペ 公開二次審査」最優秀賞「Hotarubi (ホタルビ)」安藤良和氏、ほか入賞5作品が決定。審査委員は赤松佳珠子委員長、原田麻魚氏、須部恭浩氏、東海林弘靖氏、村西貴洋氏。私はこの二次公開審査の準備と運営を担当。最優秀賞は昨年度に続き母校多摩美の卒業生が受賞、もちろん審査に影響がないように終わってから「実は…」と明かすのだけれども、同窓生の活躍は嬉しいですね。

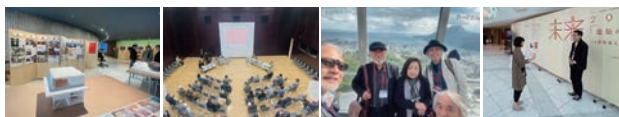


夕方から「ウェルカムパーティー」がメイン会場内、国際会議室にて松山将勝大会委員による乾杯の発声を合図にスタート。全国から集まる建築家との交流も大会の醍醐味のひとつ。酒と余興のマジックショーで盛り上がる。夜には「別府温泉ナイトI」、我々は関東甲信越支部メンバーと街に繰り出して2次会、さらに学生会員宿泊先の古民家を改修した民泊施設にて見学がてら3次会へ。

11月29日 大会2日目



朝には別府駅前周辺の温泉を楽しむ



午前にはメイン会場の展示やシンポジウムを見て回る。メイン会場シンボルとなるグローバルタワーに昇り街を360°ぐるりと俯瞰(名誉会員表彰式に出席される南條洋雄夫妻、前夜バンドナイトで演奏した大川宗治氏、彦根明氏と共に)。また合間には古巣、本部広報委員会の動画取材をアシスト。写真は関本竜太氏へのインタビュー風景。



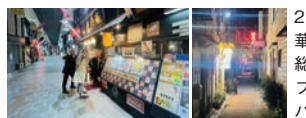
午後はコンベンションホールにて「大会記念式典」。佐藤尚巳会長をはじめとした開催挨拶、来賓祝辞、名誉会員の表彰式などが執り行われた。



式典に引き続き、「建築の未来Ⅲ メインシンポジウム」。基調講演は重松象平氏。クロストークは末廣香織氏、重松象平氏、末光弘和氏、石山友美氏。九州支部所属会員を中心とした登壇者によるもので、モデレーター役の末廣さんを中心に活躍している若手メンバーの仕事や考えから建築の未来について考える。借越ながら会場質問では私からも「住宅建築の未来」について登壇者に意見を伺った。



夜には「レセプションパーティー」。古谷誠章さんの乾杯のご発声でスタート。本部広報委員(伊波サチヨ氏と会田友朗氏)のインタビューのお手伝いも兼ねてご挨拶。メインシンポジウム登壇者の皆様ともご挨拶。末廣さんとは大学時代のアルバイト(SKM)以来、約35年ぶりに再会! こうした全国の会員との交流も嬉しい。最後は森田敬介代表はじめ千葉地域会メンバーによる次年度「建築家大会2025千葉」PR。



2次会は「別府温泉ナイトII」。味のある繁華街にて関東甲信越支部メンバー(写真は総務委員会で一緒の大山早嗣さんとスタッフ)で盛り上がる。3次会は路地裏のライブハウスで九州支部の皆さんと合流。

11月30日 大会3日目(最終日)



左から、新・旧大分県図書館(共に設計:磯崎新)、大分県立美術館(設計:坂茂)、別府地獄めぐり。最終日にはさまざまなエクスカージョンツアーが用意されていたが、あかりコンペ展示撤収作業待機で出遅れて申し込みせず、今回は個人で観光と建築を見学。帰りの飛行機もJIAメンバーと一緒に、羽田に着くまで楽しめた。

最後に、大会委員長の松山将勝氏をはじめ、九州支部の皆様のパワフルな企画力とあたたかいホスピタリティに感謝申し上げたい。コンGRESバッグや記念冊子の省略、QRコードによる受付の合理化、行政の協力を得た会場費の工夫や試みなども大いに参考になりました。

いよいよ2025年度は千葉大会が開催予定です。私も支部総務委員の立場から盛り上げたいと思います。

建築家大会参加3年目に思うこと

JIA 学生会員 伊藤綾香
日本大学大学院1年



学生の会@jointが建築家大会に参加するようになり、今年で3年目を迎えました。今年も5名が別府大会に参加しました。学生の会が次第にJIAに溶け込んでいく様子を間近で感じています。今年度は、公開エスキス会(詳細はp.30)を経験した後、大会に参加しました。その影響もあり、学生の活動を認知し、賛同してくださる方々が増え、人と人とのつながりが築かれていく実感を得ています。毎年学生は民泊を利用し、同じ屋根の下で共に過ごすことが恒例となっています。さまざまな大学から集まった初対面同士が、1日も経たない内に敬語が抜けたり、後輩がリーダーシップを発揮し始めた



別府市公会堂にて
学生の会@jointの
メンバーの集合写真

りと、遠慮のない仲間意識が芽生えていきます。普通なら1年かけて築かれるような関係が、ここではわずか1日で育まれるのです(笑)。この他にも、建築家大会でしか得られない特別な経験をさせていただきました。この背景には、学生の会を支えてくださる関東甲信越支部の皆さまのご支援があります。この場を借りて、心よりお礼申し上げます。

“イソザキさん”が残した建築の遺伝子

JIA 学生会員 井筒悠斗
東京大学大学院2年



大会1日目、磯崎新氏をテーマとしたシンポジウムに参加し、多面的な人物像と独創的な建築哲学に圧倒されました。元磯崎アトリエ所員の西岡弘氏の実体験からの“イソザキさん”と、元アートプラザ館長の菅章氏による客観的に見る“磯崎新”、両局面から語られる豊かな議論が、これまでにない視点で学ぶことの多い時間でした。磯崎氏の理論の裏にある偏愛、仙田満氏の語った磯崎新の原風景への興味、晩年の沖繩への移転というアンサーも引き込まれる内容でした。

教科書上の磯崎氏の思想を超えて、今後の建築を考えるためのヒントが詰まった貴重なシンポジウムでした。

地元愛溢れる癒しの里 大分

JIA 学生会員 高橋花穂
東京電機大学3年



大会1日目は緑×湖×温泉が魅力の観光地である湯布院を散策しました。平日にもかかわらず多くの観光客で賑わっていたのはもちろんのこと、日常的に地元の人にも利用される観光地になっていたのが素敵でした。2日目の夜は別府駅周辺にある昔ながらの銭湯に入りました。そこには地域ならではの入浴マナーが存在し、「温泉のへりに座ったら注意される」「銭湯に入ってきた見知らぬ人から必ず挨拶される」といったユニークな体験をした人もいたようです。8世紀から歴史書に名を残す、別府温泉ならではの地域コミュニティを体験することができました。

魂を慰める建築空間

JIA 学生会員 池田耕一郎
日本大学3年



磯崎氏の「アートプラザ」をはじめ、メンバーで大分建築巡りをしました。大分という土地を知り、お互いの気づきを共有し、建築の学びを深められた貴重な時間でした。巡った中で、メンバーが思い思いに過ごして向き合った建築があります。楨文彦氏の「風の丘葬祭場」です。木目を残したコンクリートの徹底した直線と、それを強調する曲面の地面が印象的です。加えて、巧みな自然光の操作によって、葬儀の場面ごとに空間が変化していきます。葬祭場という非日常な建築を目の前にして、言葉では表せない空間に感動し、それぞれが時間をかけてしっかりと記憶していました。学校では味わえないリアルな建築空間を心に深く刻むことができました。

建築家の熱意を実感 @ 北九州

JIA 学生会員 辻本雄一郎
早稲田大学4年



3日目の帰路は、学生会員で北九州の建築を探索しました。最初に訪れた「北九州市立美術館」では、磯崎新先生の立方体へのこだわりを感じました。建物全体はもちろん、開口や階段、外壁タイルに至るまで、あらゆる要素が正方形で構成されており、その美しさと情熱に圧倒されました。続いて訪れた池原義郎先生設計の「北九州市立大学」は、薄板を並べたような美しい外観が印象的でした。近づくると全ての壁の端部がデザインされており、細部への執念に驚かされました。建築家たちの熱意に触れ、自分も物事にこだわりを持って向き合いたいと強く刺激を受けました。

JIA 建築家大会 2025 千葉 開催で JIA を考えよう



関東甲信越支部長
渡邊 太海

昨年11月、全国大会が別府で開催されました。九州支部の手厚いもてなしに感動しました。全国大会は地域の建築家の活動を直に知るとともに会員間の交流にもつながり、JIAの全国組織の良さを感じられる貴重な機会です。

しかし、最近の全国大会は徐々に予算が膨れ上がり、総額は2000万円超え、協賛金も1000万円近くなっています。日程も木曜日から始まり金曜日が式典、土曜日にエクスカージョンが主流になり、ウェルカムパーティー、レセプションパーティーなども恒例となっています。登録料や参加費用も年々上がっています。担当した各支部からは、「負担を減らさないと若い建築家が参加できない」「準備で本業がおろそかになる」「なんのためにお金集めているのかわからない」「こんなに大変ならば毎年やらなくてもよいのでは」という声も聞かれます。こうした状況を踏まえ、関東甲信越支部で行う全国大会は会員の負担を減らし、持続可能な大会となるモデルを提示したいと考えています。

また内容の点でも見直しを図り、市民や学生が参加できる大会を目指します。JIAのさまざまな取り組みを発表し市民とともに議論する場を設け、公益社団法人JIAの取り組みや建築家と市民が協働する活動が、良質な社会を目指していることを伝えたいと思います。

そして「建築家」がどのような職業で、どんな志をもっているのか、どんな経験、実績、資格をもち、どのように継続的な勉強をしているのか、わかりやすく社会に伝え「建築家」の職能の確立をいっそう進めたいと思います。

先日千葉地域会の新春の集いに参加しました。その際に、ある市の建築主事の方から、建築家の定義は何かと質問がありました。建築家の定義はこうですと、一般の人にはっきりとわかりやすくすることがJIA活動の大切なことだと、私は再認識しました。現在本部では、(一社)日本建築士会の総括専攻建築士とJIAの登録建築家、この2つの位置付けと建築家はどんな人なのかわかりやすくすることを議論しています。そのなかで「登録建築家」と建築家資格が明記された「UIA協定」(国際建築家連合採択)の関係を再確認しました。

- 現在の「登録建築家」の認定・登録基準はUIA協定に準じており、建築家職能における世界共通の資格になりうること。
- UIA協定は業態にかかわらず、建築家の責任における依頼者の利益保護と、建築家が業務をコントロールできる組織形態が求められていること。(これまで建築家資格制度では専業を旨としてきましたが、ゼネコンに勤めていることが直ちにUIA協定に合わないということではないため、今後、認定方法を検討します)

建築家の定義は、専業兼業の業態に関係なく国際基準に準じることがキーになると思います。

昨年、各地域会に実施したアンケートでは、「地域会参加のメンバーが少なく、役職を同じ人が何年もやっている」「活動をやらされている感があり義務感が先行してやる気が出ない」「活動がサロン化し若手が入りにくい」、また「地域会に入っていない会員が多くいることで地域会の活動がよそ事のようになっている」、などの課題が挙げられました。

現在、全国の正会員は10年前に比べ約1,000人(25%)減少し、関東甲信越支部正会員の約7割が60歳以上という構成です。オンライン化などの環境の変化、対面や交流などの重要度や会員それぞれの価値観にも差があります。JIA発足当時の考えに対する理解にも違いがあるように感じます。私は会員の皆さんにJIAの意義を感じてもらえるよう、JIA活動を進めていく上で以下の点を大切にしていきたいと思います。

- 活動はボランティアの中で成立していることを忘れず、身の丈に合った活動とする。
- 内向きな議論でなく、社会にとってためになるのかを中心に考える。
- 理事会、役員会、執行部が決めるのではなく、地域会や会員からの意見を大切にする。

JIA建築家大会2025千葉は千葉地域会だけでなく、関東甲信越支部全体で作らなければなりません。この大会に向けての準備や協力などの機会が、地域会や委員会活動の課題、社会に向けての建築家の定義などさまざまな議論をするきっかけにもなると信じています。

金曜の会

坂田涼太郎氏トークイベント 「構造のダイナミズムを求めて」



金曜の会
井原正揮

扉を開けた瞬間、視界の端に飛び込んでくるのは、建築やJIAにまつわる書籍が整然と並んだ書架。そして、その書架の脇からは、ふわりと柔らかな笑い声が聞こえてくる。ここは外苑前に位置するJIA館1F・建築家クラブ、「金曜の会」の拠点だ。2009年以来、年に5～10回のペースでゲストを招き、建築をキーワードにした自由闊達な対話と交流を大切にしてきた。会場には建築家だけでなく、学生やまったく異なる分野の人々まで足を運び、三々五々ワインを片手に談笑する姿も見られる。まるで昔の文壇を思わせる“サロン”的な空気——それこそが、「金曜の会」を特徴づける大きな要素だと考えている。いや、考えていた。

というのも、ここ数年の情勢の影響を受け、「金曜の会」も変化を余儀なくされたためだ。新型コロナウイルスの拡大を機にオンライン形式を導入した結果、遠方に転勤された方や海外の建築ファンが気軽に参加できるようになるなど、思わぬところで新しいつながりが生まれた。その一方で、これまで会場に足繁く通い、書架を眺めながら会場ならではの熱気を味わっていた常連の一部がオンライン視聴へと移行し、ほんの少し寂しさを感じたのも事実である。私自身、やむを得ず出張先からオンライン参加した経験があり、どちらかを否定するわけではまったくない。ただ、「会場でしか得られない体験」と「離れた場所からでも参加できる柔軟さ」をいかに両立させるか——それがいま、私たちが直面している大きな課題なのだろう。

そんな試行錯誤のさなか、2024年11月1日に開催されたのが、新進気鋭の構造家・坂田涼太郎氏（坂田涼太郎構造設計事務所）による「構造のダイナミズムを求めて」である。事前に配布したパンフレットには、今回の特徴として「会場にお越しになった方は坂田氏の構造模型の実物をご覧ください」という一文を記しておいた。この告知に心を弾ませた参加者は多かったようで、当日、書架のそばにずらりと並べられた模型群を前にすっかり引き込まれる人、じっくりと中を覗き込みながら小さく頷く人など、さまざまなスタイルで模型と向き合う光景が生まれていた。

また、上記のパンフレットには坂田氏の言葉を拝借した。「構造デザインとは本来動かない構造物にダイナミズムを与えることだと考えている。その点、木は表情が豊かで、このような架構を生み出すには魅力的な材料である」という一文である。模型を目の当たりにすると、その言葉どおり、一つひとつが呼吸しているかのような躍動感を放っているのが伝わってくる。もちろんオンラインでも、模型に囲まれた講演の雰囲気を感じてもらえるような配慮はしたつもりだが、実際に模型を取り巻く空気に触れ、「手にとってこそわかるもの」を探り当てる体験には、やはり別格の説得力があった。造形と構造の一体性や構造体の自由度、さらには「感性」という勘所を軸に展開される坂田氏の解説——その語り口には、まるで「必然性を帯びた生き物」を目の前にしているような、不思議な熱が宿っていたのである。

とはいえ、オンライン形式の利点も大きい。多忙で会場に来られない方や、物理的な制約を超えて参加する遠方の方々にとっては、新しい視点や機会を広げてくれる貴重な手段となる。私たち自身、そこから多くの気づきを得ているからこそ、いかにして両方の長所を生かしながら、「金曜の会」が育んできた“サロン”の精神を保てるかを探り続けている。これまで以上に多彩なバックグラウンドを持つ人々が、リアルの場合・オンライン双方で横断的に刺激や知見を交換し合う——そんな未来を思い描くと、不思議と胸が弾むのを感じるのだ。



模型を手に取り解説される坂田涼太郎氏

アーバントリップ実行委員会

アーバントリップ100回記念シンポジウム

—建築見学会の魅力と可能性—

アーバントリップ
実行委員会

赤川鉄哉
大川直治
芝本敏彦
南 知之



アーバントリップの紹介

アーバントリップ実行委員会は、首都圏を中心に建築、ランドスケープ、まちなみを巡る建築見学会＝「アーバントリップ」を主催しています。見学会は1990年より開催され、34年間にわたり101回のトリップを実施し、その間の見学建物は約360件、参加人数は延べ5,000人にのぼります。

見学建物は、世相を反映したもの、建築技術・設計手法に焦点を当てたもの、著名建築家に焦点を当てたもの、名作の住宅や建築家の自邸といったテーマに沿った建築を委員会で選択しています。普段見学できない建物を見学できることと、設計した建築家より計画のプロセスからディテールまで、専門的な玄人向けの話題などが直接聞けることがトリップの魅力となっています。

2013年のJIAの公益社団法人化後は、一般の方の参加も受け付け、近年はYouTubeへの配信も含め、建築文化の理解並びに発展に寄与しています。(大川)

100回記念シンポジウムを開催

2024年度にアーバントリップが通算100回を数えるのを機に、今までのアーバントリップへの参加不参加を問わず、出席者を募り、記念イベントとしてシンポジウムを開催することにしました。この趣旨は、今までの歴史を振り返り、私たちの行う見学会のスタイルを再確認し一番の魅力を浮き彫りにすることで、今後の継続や発展にどのような視点が必要かを確認することでした。アーバントリップに対して客観的な評価をしていただける登



クロストークの様子

壇者を検討し、大川、赤川、中村各委員がコアとなり、当日の構成や配布用パンフの作成を検討しました。

シンポジウムは、11月14日(木)に建築家会館大ホールにて開催。大川委員によるアーバントリップの紹介ののち、千葉学さん、押野見邦英さん、磯達雄さん、佐藤尚巳JIA会長に登壇をお願いし、各々のアーバントリップとの関わりや、ご自身の作品の見学会、見学体験などをお話いただきました。

その後のクロストークでは、南委員がファシリテーターとなり議論を展開。当日の様子は、(株)新国際通信社・神村正晴さんの協力を得て、YouTube公開を念頭に動画に収めました。

シンポジウムの後には、参加者が自由に話し合える場として立食の懇親会を開きました。佐藤会長の乾杯で開会し、小高委員のジャズ歌唱や佐藤会長のサクソ演奏を楽しむ時間も設けて、多彩な交流ができる場としました。バックでは過去のアーバントリップの映像を編集して流すことにより、リアルな見学会が蘇ればよいと考えました。(芝本)



シンポジウムには約50名が参加



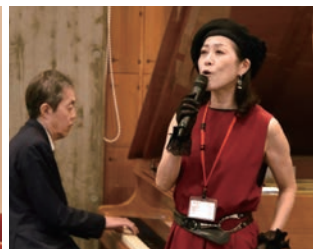
今回作成したパンフレット



シンポジウム後の懇親会



佐藤会長のサクソ演奏



小高委員のジャズ歌唱

クロストークから見た“建築見学会のあり方”

クロストークでは、各登壇者が話された内容に触れながら、シンポジウムのテーマである“建築見学会のあり方”や“果たすべき役割”について語り合いました。

登壇者4人の方のお話に通底していたのは、「見るということは大事なことである」という建築見学の重要性でした。しかし、なぜ大事なのか？ それは見学が、全身体を通した体験であり、視覚だけではない全感覚の体験に価値があるからです。またそれは歴史を掘り下げたり、心理に触れたりするなど範囲も広いのです。

また、建築を社会に伝えていくことも見学会の役割です。その場合、専門家か一般の人かを問わず、建築がいかに素晴らしいかを伝えることが重要であり、地域の人がいかに自分たちの町の建築を愛していけるかがポイントです。一方で、見るだけでなくオーラル・ヒストリーのように人から人へ伝わっていく記憶も大事であり、それは市民がいかに建築を議論する土壌があるかに関わってきます。そのためには、私たち建築家が街に出て、市民に近づき、語るようにしていくことが必要であり、建築の見学会がそのような機会を広げるものになることが肝要であるということでトークの結びとなりました。(南)

シンポジウムを終えて

今回のシンポジウムでは、雑誌やSNSなどの表層的な情報だけではなく、五感を使うことのできる現地へ行く見学の大切さが語られました。同時に、見学会への一般の方の参加を促進することは、歴史的に重要な建物の解体などが危惧される日本の建築文化の起死回生になると感じました。磯さんご自身の見学会で、名所と言われるところは人気があるために何度も繰り返して説明しなければならない内情を語られましたが、多くの一般参加者への地道な拡散が日本の建築文化の向上に寄与することにも気づかされました。そして、一般の方への建築への意識付けのためには、まずJIA内の周知が大切であることも再認識しました。(芝本)

委員の感想

- これまで7回ほど見学会に参加しましたが、今年からこの委員会メンバーに加えていただきました。100回記念シンポはこれまでの歴史を知る貴重な体験になり、これからはその意義を引き継ぎ、建築やまちづくりなど深掘りし、新しい視点で魅力を見出せるツアーを企画したいと思います。(飯沼)

- 見学する施設の方や講師の方々のご理解と協力、委員の行動力によるアーバントリップを34年間100回開催はすごい歴史だと思います。今回は準備段階から委員として参加し、当日は受付と歌の担当でした。行き届かなかったところも多々ありましたが、皆さんの記憶に残る会であれば幸いです。(小高)
- 準備のため過去の画像や動画を見ると、自分が一般で参加した際の画像もあり懐かしく感じました。また、活動の経過を整理していたところ、データの一部を個々が所有しているケースも。貴重な動画等もあるので、今後は上手に保管できると良いなと感じています。(福西)

パンフレットを作成

シンポジウムの開催に合わせ、参加者へのアーバントリップの紹介と今後のPR資料を兼ねて簡単なパンフレットを作成しました。執筆にあたり、過去のトリップについて調べたり、ヒアリングをしたりしたのですが、残念ながら、初期の詳しい資料は見当たらないものの、参加者の感想などを交えたレポートが、第1回よりほぼ毎回『Bulletin』に掲載されるなど、残されていたことにはたいへん驚きを覚えました。改めて歴史の深さ、記録の重要性を感じました。

今回の編集にあたっては、蔵楽友美さんに多大なるご協力をいただき、何とかデザイン的にも胸を張れるようなものが出来上がったかと思います。ここに感謝とお礼を申し上げます。(赤川)

本稿では、当日のイベントの詳しい模様は、誌面の都合上お伝えできませんが、支部HPに成岡茂さんによるレポートを掲載しています。また、支部YouTubeチャンネルには動画をアップロードしています。どうぞこちらもあわせてご覧ください。

〈アーバントリップ実行委員会 100回イベント企画メンバー〉

赤川鉄哉、飯沼竹一、大川直治、小高由紀子、芝本敏彦、中村雅子、福西浩之、南知之
協力：(株)新国際通信社 神村正晴 パンフレット協力：蔵楽友美



参加者全員で記念撮影

たかすけ
山田能資氏に聞く
伊達冠石を通して
その内面を視つめる



今回は、宮城県丸森町の大蔵山で、石材の生産・加工・施工を行う大蔵山スタジオの5代目山田能資さんにお話をうかがいました。大蔵山で採れる伊達冠石は、彫刻家のイサム・ノグチが好んで使用したことで知られ、今では建築やアートでも広く使われています。石材事業から発展した新たな取り組みについてうかがいました。

—まず大蔵山スタジオについて教えてください。

大蔵山スタジオ(旧山田石材計画)は、大正時代に初代・山田長蔵が宮城県の大蔵山^{だてかんむりし}で伊達冠石の採掘を始め、そこから採石だけでなく加工や施工、販売など、事業を変化させながら5代続く石を専門に扱う会社です。

大蔵山は2000万年前に火山から噴き出したマグマが冷えて固まって形成されました。その山が海底に沈んで地殻変動を経て生まれたのが玄武岩溶岩・火成岩の伊達冠石です。私にとってこの石は、海とマグマという、まさに地球の活動が凝縮された石なのです。

—どのような子ども時代を過ごしたのですか。

祖父の代は、昭和の勢いもあって採石場をどんどん広げていました。父はそのスピード感や、山を壊していくことに疑問を感じて、採石を続けながらも、自然と向き合っていくにはどうすればよいか悩んでいました。それに共感して手助けしてくれたのが、石彫家や建築家の方々に、小学生の頃はそういった作家さんがよく大蔵山に来て、大蔵山を整備して再生させるプロジェクトを進めていました。自宅は山から少し離れた住宅地にあり、田舎なので気の利いた宿泊施設がないため、作家さんたちはよく我が家に泊っていました。

1989年には大蔵山スケープキャンプというプロジェクトを発足し、大蔵山に巨石を使った舞台など、地元の石や木、土を用いた施設を造成していきました。現在採石場の跡地にさまざまな文化施設が点在していますが、この風景をつくり始めたのが父で、子どもの頃は父と協働するクリエイティブな方々が周りにいる豊かな時代を過ごしました。

—山田さんご自身はどのようなことに興味があったのでしょうか。

高校では陸上部に入っていたのですが、きちんと取り組まずに置いていかれる状況で、そんな中、1年生の終わり頃に陸上部の顧問の先生に廊下ですれ違いざまに「お前、絵をやった方がいいぞ」と急に言われたのです。陸

上部を退部できるのでラッキーと思いましたが、よく考えると先生に絵を見せた記憶はなくて……、まるでお告げのようでした。幼い頃から絵を描くのは好きでしたが、入部するとすぐにハマってしまいました。

大学でも美術部で絵を描き続け、大学3年時に個展を開くと、ある方が「もし山田くんが絵をやりたいんだったらイギリスかアメリカに行った方がいい」とおっしゃったのです。その助言もあり、大学卒業後はロンドンの芸術大学セントラル・セント・マーチンズに留学してグラフィックを学びました。

セント・マーチンズでは、理論的に形を構築していくことを徹底的に学びました。日本人はどうしてもフォルムから入りがちですが、その前に何をどう捉え発展させたのかが評価されます。経営者になった今、その重要さを痛感しています。

—帰国後に家業を継がれたのですか。

はい。父の存在は大きかったですし、4代続いているから継ぐ意識はありました。最初の1年間は東京にある石材店で丁稚奉公をさせていただきました。

その後、当時、山田石材計画(旧社名)は2つの採石場を経営していました。ひとつは大蔵山で、もうひとつは福島県にある芝山という白御影石が採れる場所でした。私はまず芝山で石の採り方を一から勉強しました。東日本大震災後は大蔵山の方が被害が大きかったので、宮城に戻り、山田石販という小売りの会社でお墓を直す仕事などをしながら、営業を7年間ほどやりました。そして2017年8月、37歳で会社を引き継ぎ、そのタイミングで社名を大蔵山スタジオに変えました。

—代表になり、事業内容はどのように変化していったのでしょうか。

これまで墓石の製作や施工が主な仕事でしたが、そこでは自分の能力を生かしきれないし、また、その事業自体は他の会社でもできることだと思ったので、そういった小売事業は少しずつ縮小し始めました。それから福島

の芝山も売却しました。

そして伊達冠石を建築やアートの専門家に提案して、協業したり、魅力を発信することに力を入れ始めました。子どもの頃や学生時代にアーティストとの交流は身近にありましたし、美術や建築と何かで関わりたいという思いが自然に高まりました。作家と協業しながら、当社が窓口となって、作家の作品を提供するような事業モデルも描いていたので、それも徐々に実現していきました。もともとやりたかったことにだんだんフィットしてきていて、これからも大蔵山でしかできないことにフォーカスしていきたいと思っています。

もともとあった事業をどんどん縮小していくと、当然売り上げが下がってきますし、しばらくは非常に大変でした。芽が出始めたのが3、4年ぐらい前でしょうか。だんだん設計事務所さんなどから、伊達冠石を使ってみたいとお話をいただくようになりました。今では採掘から、オーダーにあった石を選定し、設計図を描いて加工、施工まで自社で行っています。

—伊達冠石を建築で使いたい場合はご相談できるのですね。

はい。デザインや加工の提案は、私が自ら絵を描いています。学生時代の経験が生きていますし、今でもアイデアを出す作業は楽しいです。

少し話は変わりますが、教会建築もそうですが、最近、祈りの空間がすごく重要だと改めて認識しています。人間はこれまでそういう潜在的な感覚と向き合ってきたはずなんです。でも今の建築の中にそういうことができる空間が少ない気がしています。

石は素材でもありますが、恒久的なものですから、石を使うことで、そういった人間がもともと持っている祈りという潜在的な感覚にも同時に向き合えるお手伝いができればいいなと感じています。大蔵山スタジオはもともと墓石をつくっていますし、それも再定義して提案していきたいです。人々が石とどう向き合ってきたのかを同時に伝えられたらいいですね。

—最近の取り組みについてもお聞かせください。

伊達冠石は、建築やアートの他にも、ドアノブや洗面台などのプロダクトも展開しています。

最近では伊達冠石だけにとらわれない動きもしていきたいと思っています。大蔵山で採れる土を左官職人さんに使ってもらったりもしています。自社の壁に塗ったところ、問い合わせが来るようになり、レストランなど商業空間の壁仕上げ材として提案できるのではないかと考えています。



選定された巨石を配した幻想的な空間



山田氏がデザイン、大蔵山スタジオにて制作されたローテーブル「KON PAC」

それから、今年工場を拡張して、5月ぐらいにオープンする予定なのですが、ただの工場ではなくて、アトリエのようなものづくりの空気感を感じられる場所にしたいと思っています。地元の建築家の方に協力してもらいながらつくっているところです。その他にも磁器のスタジオや、香りのスタジオ、地域で採れるものを提供する食堂もつくりたいですね。

私はやはりクリエイションが好きなんです。そのプロセスも完成したときの空気感もすごく好きで、非常に刺激的です。その刺激的な環境を僕は山でつくっていきたい。大蔵山という場所で、この土地の可能性を引き出して、それをみんなで共有して発信するような会社づくりをしていきたいと思っています。

—クリエイションがおもてなしにつながっていますね。

自分自身が楽しみたいのですよね。そうすると来てくださる方も楽しめると思います。そのサイクルが人生を豊かにするのではないのでしょうか。大蔵山周辺は今本当に美しくなっています。ぜひ山に来ていろいろ感じてください。

—貴重なお話をありがとうございました。

インタビュー：2024年12月13日

大蔵山スタジオ ザ・ギャラリー東京にて

聞き手：小山光・佐久間達也・望月厚司(『Bulletin』編集WG)

PROFILE

山田能資 (やまだ たかすけ)

大蔵山スタジオ

1980年 東京都生まれ 玉川大学文学部英米文学科、ロンドン芸術大学セントラル・セント・マーチンズ校 卒業。2017年より大蔵山スタジオ株式会社 代表取締役社長。2024年6月 THE GALLERY TOKYO 開業。
INSTAGRAM : @ okurayamastudio.design

コミュニケーションの 舞台をつなげる



ほこいわ
鉾岩 崇

1988年広島大学卒業

杉本俊多先生との出会い

大学3年から第四類という括りの中で専門を選ぶことになるのだが、建築に進みたかったので教養課程は比較的真面目に勉強したように思う。当時杉本先生の『建築の現代思想』（鹿島出版会、1986年）が出版され、すごい先生がいるものだと感動し、どうしても師事したいと思った。ポストモダンが方向性を失い、次の時代のヒントを皆が模索している時期だ。研究室に入ってすぐに、先生の話す内容に全くついていけないことに後悔するのであるが、時すでに遅しで腹をくくるしかない。西洋建築史の試験では全く答えがわからず、回答欄にその場で考えた椅子をスケッチして提出したこともある。杉本先生は大変厳しい指導をされたが、洒落っ気もあり、もしかして恩情があるかもと浅はかな期待をしたように思うが、当然そんなことがあるはずもない。設計製図の課題では、コンセプトやプランが纏まらないうちにいきなりケント紙の上でエスキスを始めて、何度も修正してはインキングするということを繰り返していた。提出するケント紙がポロポロになり、こんな学生は初めてだと呆れられた。自身の甘えと軽薄な思考に赤面する思いであるが、今でも先生と連絡が取りあえる関係が生まれたのは私の宝である。

原爆ドームとオットー・ワグナー

杉本研究室では卒論と卒業設計の両方が課せられていた。当時研究室で原爆ドームの元の姿、「物産陳列館」の紙模型を販売するという企画を受けていたように思う。「原爆ドーム補修計画図」の極めて正確な実測図を元に、破壊された部分を写真集の口絵の写真と図面を頼りに推測しながら全体復元図面を作成した。その上で組み立てられるように簡略化・部品化するという作業を地道に進めた。設計者はヤン・レツルというチェコの建築家であり、オットー・ワグナーのもとで学んだヤン・コチェラに師事していたことを知る。つまりワグナーの孫弟子となる人物である。その流れで、「物産陳列館」とワグナーの建築との比較分析が卒論のテーマとなった。20世紀初期の広島という地方都市にゼツェッションとネオ・バロックの様式が混在した建築が誕生していたという事実は興味深い。当時原爆ドームとワグナーを関連づけて形

態分析を行った例はまだみられず、一つの成果であると評価されたことは記憶している。

街にコミュニケーションの舞台をつくる

杉本先生の話で特に記憶に残っていることがある。「建築におけるファサードはコミュニケーションの一舞台であり、内蔵された機能と外部の人間の間立って中間領域を形成し、両者の接触を調整する」。卒業設計は原爆ドームが面している元安川沿いの広場を中心とした観光、宿泊、商業施設のある街並みを計画することであったと思う。古典的な造形システムを生かしながら、市民と街とのコミュニケーションの舞台としてどのようにファサードを形成するのかがテーマの一つであったように思うが、上手くいったのか甚だ疑問である。もう一度見たいと思ったが残念ながら手元にない。

中国プロジェクトを経験して

2002年頃から中国のプロジェクトに関わるようになり、建築のスケールが都市と人に与える影響を意識するようになった。北京オリンピック会場の天津スタジアムをはじめとして、大空間を伴う公共性の高い建築を手がけた。2010年代前半までの中国の都市は、為政者の威信顕示と建築家の欲望実現という目的が重なり、巨大さや奇抜さを求めたアイコン建築で溢れていた。建築が都市の文脈を断ち切り、市民を置き去りにする状況を目の当たりにして、都市と市民とのコミュニケーションの場を建築の中にどうやってつくるかを課題として強く意識してきたように思う。私は「エッジをやわらかくする」という言葉が好きだ。建築の「際」に段階的な奥行きと変化を持たせて人と自然が入り込める余地をつくることでもある。深圳湾体育センターでは建築全体を構造と一体のポーラスな外皮で纏い、半屋外の建物際や大広場をつくることで、強烈な日差しと雨を和らげる日常的な市民活動の場を生み出した。都市はコミュニケーションのできていると思う。人、建築、自然、情報が交わる一つひとつの小さなコミュニケーションの舞台の連鎖が都市をつくる。その連鎖を生むインターフェースとしての建築のファサードの持つ意味を大切に考えるようになったのは、杉本先生との出会いにあると思う。

Pater familias



小川真樹

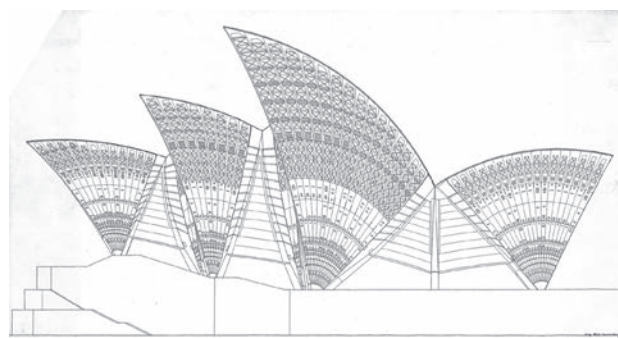
1985～1998年 三上祐三+MIDI 総合設計研究所 在籍

これを読む人のなかに三上祐三さんを知る人がどのくらいいるだろうか。この稿と同じ頃に出版される『建築家三上祐三が遺したものに』に巻末文を寄せてくださった三宅理一さんは「三上祐三の事蹟は、まだ日本の近代建築史の中にきちんと位置付けられていない」と書かれている。まして40年前に藝大生だった私にとっては、建築雑誌で目にする機会の多い建築家のひとりではなかった。当時の私は自信過剰で、入りたい事務所にはどこへでも入れるとさえ思っていたのだけれど、一択だった高橋航一さんの第一工房に入れずに生まれて初めての挫折に打ちひしがれていた。そこへ三上さんから研究室の奥村昭雄先生に「やることになった東急の音楽ホールを担当させたいので誰かいないか」と電話があった。三上さんは藝大で「海外建築思潮」という授業を持たれていて知っていた。また、構造の授業で見学した「志木ニュータウン」では設計者としてPCを多用した集合住宅の特殊な工法を説明されるのを聞き、そのあと竣工した「洗足学園前田ホール」の柿落としコンサートでの体験とあいまって、他の建築家となにかが違うという強い印象を抱いていた。でもそれが何かはわからなかった。担当する仕事まで決まっているところに請われて入る、というシチュエーションに魅力を感じてお世話になることにしたというのが実情だったのだ。

そんな不遜な若者は早々に鼻っ柱をへし折られることになる。三上さんは自分で全てを決める所長で所員をコテンパンに打ちのめすことが多く、外から見ていた印象とは大違い。いま思えばそれがよかった。5年で独立するつもりが13年もいることになったのはもちろん建築的な価値観に共鳴したからにほかならないが、私が副所長になったころ、大きなプロジェクトの見積図の納品に間に合わなかったことがある。原因は所長の決定にノーと言えない私のスケジュール管理の甘さにあったのに叱責されることはなかった。三上さんは図渡しの会議には自分も出ると言い、見積部隊の前で「全図面が揃っていないのは全て私の責任」と言って謝ったのだ。この人は自分に厳しいから近い人間にも同様に厳しいのだ、と思うと理解できることが日増しにふえていった。

話は飛ぶが、三上さんが亡くなったときの追悼記事を毎日新聞に寄稿し、その英訳を長島孝一夫人のキャサリンさんをお願いしたとき、三上さんの厳しさについて彼女はPater familiasと訳された。これは「ローマ人の父」とも和訳される言葉で、ヨーロッパでは横暴な家長の象徴なのだそうだが、同時に全ての責任を負う人間という意味も持っているという。まさにそういう人だった。つまり、彼にとって事務所は家庭と同じだったのだ。

こんな話で終わらせたら確実に天国から怒鳴られる。冒頭に書いた三上さんについての本を脱稿したいまごろになって、やっと入所前に「志木ニュータウン」や「前田ホール」を見た時の、あの強い印象はなんだったのか分かる気がする。私が担当した「Bunkamuraオーチャードホール」でも変わらなかったその設計姿勢には、建築の潮流とは無縁の厳しい規律が内在したのだ。かつて三上さんはウツソンの事務所で「シドニーオペラハウス」の基本設計に携わり、ウツソン辞任後は構造のアラップ事務所に移籍して設計の中核に居続けた。それは構造の裏付けのないデザインを構造的な発想で成立させる壮大な現場で、そこで培われた規律は「How to build (いかにして造るか)」から始まる思考と考えると理解できる。もうひとつ、私にとって大切な教訓は、何度も聞くことになった「金を出す人より使う人のことを考える」という明快なフレーズだった。これもまた、政権交代で不本意な結果に終わった「シドニーオペラハウス」の内部設計からの教訓だったのかもしれない。3Dプリンターや経済原理だけで建築が出来上がってしまう現代にあって、この2つは私のPater familiasから学んだ財産だと思っている。



Arup時代の三上さんがフリーハンドで描いたシドニーオペラハウス

ウィーンでの生活と 建築設計事務所での働き方

—オーストリアのスタンダード—



鈴木 実

このたび、あるご縁でウィーンでの暮らしについてのレポートを依頼されましたので、こちらでの暮らしや働き方について紹介させていただきます。

私は、日本の大学(東京理科大学理工学部、修士、奥田研究室)で建築を学んだ後、スペインのバルセロナに留学し、その後オーストリアへ移住して、以来約20年オーストリアに住んでいます。ウィーンには約3年前から住んでおり、現在はMHM Architects(以下、MHM)という建築設計事務所に勤務しています。

MHMは現在約30人の所員を抱えるウィーンの建築設計事務所です。所員の国籍はドイツ、ハンガリー、ボスニア、スロヴァキア、ポーランド、ルーマニアなどさまざまです。地域柄、東欧の出身者が多く、私は事務所内で唯一のアジア人です。言語に関しては、オーストリアの公用語はドイツ語なので、ドイツ語を使用して仕事をしています。プロジェクトは主に隣国ドイツとオーストリア国内のものが多く、用途は事務所建築が中心ですが、住宅、ホテル、美術館などの実績もあり、最近では病院建築の分野にも参入しています。

ウィーンでの働き方

勤務時間に関しては、私は普段朝8時頃に出勤します。出勤時間はフレックスタイム制ですが、9時30分頃までにはみんな出勤してきます。もちろん個人的な用事があるときはもっと遅く出勤しても構いません。事務所のコンピュータにはプロジェクトごとの予定や所員の出勤予定(バカンスなど)を管理するアプリが入っていて、予定はみんなと共有されています。個人の勤務時間もこのアプリで管理されており、各所員は毎日仕事終わりに、今日どのプロジェクトの何の作業のために何時間働いたかを記入します。雇用契約で勤務時間は週40時間(場合によって+残業2時間)と決められているため、皆なるべくこの範囲に収まるように働きます。基本的に1日の労働時間は8時間ですが、月曜から木曜までちょっと長めに働いて(例えば残業30分)、金曜日は15時頃仕事を終えることがよくあります。プロジェクトの状況によりやむを得ず残業をしなければならない時もありますが、

“働きすぎ”てしまった場合には、休みが取れそうなタイミングで「時間調整」と言ってその分のお休みを要求できます。これは有給休暇にはカウントされません。

お昼休みは12時くらいから各々好きなタイミングで取ります。時間は決まっていませんが、手早く30分くらいで済ませる人がほとんどです。スーパーでサンドウィッチを買って来たり、近くのレストランからお持ち帰りをしたり、家からお弁当を持ってきて事務所のレンジで温めて食べたりします。冬場は事務所内の休憩所で、夏場は外に出て広場や通りのベンチに座って昼食を取る人が多いです。ちなみにコーヒーは外で飲むと高いので、事務所で飲みます。オーストリアの職場には大抵コーヒーマシンがあり、従業員が工作中いつでも自由にコーヒーが飲めるようになっています。ウィーンでは歴史的に有名な喫茶店(Café CentralやCafé Sacherなど)が観光名所になっていることから、コーヒーがオーストリアの大事な文化であることがうかがえます。



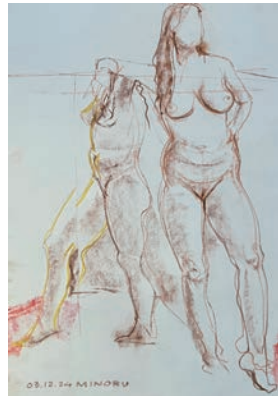
Café Centralの入り口に
並ぶ観光客

16時半近くになると、退社する同僚がちらほら出てきます。17時半くらいには社内にいる同僚の数はほぼ半数になっています。「昨日は19時まで仕事したよ」と言うとか、「なんで?かわいそう!」とか、「ボスに媚を売っているのでは?」と思われてしまいます。だらだらと働いている人はおらず、この時間帯になると、皆多少焦り気味になります。家族との約束やヨガ、フィットネスなど、次の予定が入っているからです。このタイミングで「これ悪いけど今日中に終わらせてくれる?」なんて言って

仕事を振ってくるボスやプロジェクトのリーダーは最悪ですが、幸いMHMにそういう人はいません。

余暇やバカンスを楽しむ

余暇に関しては、ウィーンにはいろいろなカルチャー・スクール、映画、音楽イベントなどの催し物が年中豊富にあり、これがウィーンでの生活の魅力の一つです。私は週に何日か仕事の後にデッサンのコースを受けたり、英語のレッスンを受けたりしています。



筆者の描いたデッサン

気の合う同僚と帰宅途中にビールを飲むこともあります。平日でも仕事の後に余暇を楽しむことができるのは幸せです。週末が来ると、街を出てハイキングなどをして自然を楽しむことが好まれます。MHMでは週末に仕事をしたことがありません。

バカンスについては、一般的に年間5週間分(稼働日25日分)の有給休暇があります。有給休暇はなるべく毎年使い切ることが推奨されます。MHMでは1~2日の休暇はいつでも思いつきで取ることができますが、1週間以上の長期休暇は前もって、数ヶ月前に事務所に申請して、許可を得る必要があります。8月に1週間、年末に1週間事務所は営業しないため、そこで必然的に約10日分のバカンスを消費し、残りの約15日をどう振り分けるかは個人の裁量によります(オーストリアで有給休暇を一律年間6週間に増やそうという議論もあります)。病気になってしまった場合、風邪をひいた場合は事務所にメールし、後から医者診断書を提出することで簡単にお休みを取ることができます。医療保険が適用されます。バカンスの最後に風邪をひいてバカンスを1週間延長することもよくあります。



ハイキングルート



MHM周辺の景色

共通した権利や義務、給与基準

給与に関しては、夏と冬に給料の1ヵ月分が余分に支給されます。つまり年間で14ヵ月分の給料が支給されます。参考までに、大学を出たばかりの人の初任給は、約39%の社会保険料を払った後の手取りで2,178ユーロ、今のレートで約35万円です。

以上のことは全て労働協約Kollektivvertragというものに基づいています。労働協約とは業種ごとに、雇用の際のルール(雇用する側とされる側の権利と義務)を定めたもので、これによって最低賃金の改定も毎年行われます。建設分野では、雇用する側の代表であるZT-Kammer(オーストリアの建築家協会のようなもの)と雇用される側の代表である労働組合(Gewerkschaft Bau-Holz)が交渉してこれを定めます。労働協約は建設分野で働く全ての労働者に適用されるので、どこの事務所で働いても労働条件に大差がないということになっています。もちろん実際には、能力に基づいて労働協約以上にお給料を払う事務所があったり、プロジェクトや設計業務の内容で違いがあるため、どこで働いても一緒というわけではありません。しかし、権利や義務の根本的な部分では共通しており、給与の基準も共通です。このため、職探しの際に心配事が少なく、便利です。一方で、権利や義務が明確になっていることで、職場をクビになったり、雇われている側の都合で転職することが頻繁にあります。誰もがそうした事態が起こり得ることを想定し、適度な緊張感を持って日々働いているように思います。

以上、オーストリアの建築設計事務所での働き方のスタンダードについて大まかに紹介させていただきました。どなたかの参考になれば幸いです。

鈴木 実(すずきみのる)

MHM Architects

2000年 東京理科大学理工学研究科建築学修士課程修了。2001-2005年 スペイン、バルセロナ留学。2005年 オーストリア、グラーツに移住。グラーツ工科大学建築学部で非常勤講師を務める傍ら、さまざまな建築設計事務所に勤務。2021年 ウィーンに移住。2021年からMHM Architects勤務。

鉄筋コンクリートのオリジナリティ

—オーギュスト・ペレ—



後藤 武

日本で最初期の鉄筋コンクリート建築家として最もよく知られているのは、オーギュスト・ペレでしょう。いち早く鉄筋コンクリート打ち放し仕上げに取り組んだことから、私たちが今現在よく知っている鉄筋コンクリート建築のあり方の礎を築いたのがオーギュスト・ペレだったと言っていいはずです。しかしながらその弟子ル・コルビュジエに比べると、古典主義的なディテールに満ち溢れたペレの鉄筋コンクリート建築は未だモダニズムとは呼びにくい性質を持っています。ペレが、鉄筋コンクリートという材料と構法に求めたものは何だったのでしょうか。この問いに答えるのが、今回の主題です。

西洋建築史の総決算

結論から言えばペレは、西洋建築史を総決算した上で新しい建築を生み出すためには、鉄筋コンクリートこそが最適だと考えていたのでした。ペレは前回の主役アナトール・ド・ボドーや弟子のル・コルビュジエの饒舌に比べると、とても言葉の少ない建築家でしたが、そんなペレが書き残した数少ない文章があります。「建築理論への寄与」と題されたペレの文章には、こんな一節があります。

最初は、木の骨組み以外の建築はない。火を避けるために人は堅牢な材料で構築する。木の骨組みの魅力は強く、そのすべての表現が釘の頭に至るまで再現されている。この時から、古典建築は装飾でしかなくなる。そのうちにフランスの土壤にロマネスクが現れ、次いでゴシック、すなわち交差リブとフライングバットレスが現れる。ゴシックは真の石の骨組みであり、ヨーロッパを覆っていった。そしていま、鋼鉄の骨組みがあり、次いでフランスで生まれた鉄筋コンクリートの骨組みがある。それは正真の建築で世界を覆わんとしている。^(注1)

ペレが20世紀の初頭に鉄筋コンクリートを使って建築を設計する際に、西洋建築の歴史を木造起源にまで遡り、そこから古代ギリシャ建築や中世ゴシック建築を経

アルベール・レヴィ館外観
Roberto Gargiani, Auguste Perret, Gallimard, 1994, p.158.

由して西洋建築史が生成してきたことを強く意識していることがよくわかる文章です。ペレにとって建築の歴史は、次から次へと新しいものが生まれては消えていく生成と消滅の過程ではありませんでした。原初の木の骨組みは、古代ギリシャ建築の装飾に痕跡として生き残ってメタモルフォーゼし、それが中世ゴシック建築へとさらにメタモルフォーゼし、鉄筋コンクリートの建築にまで引き継がれていくものだと、ペレは考えていました。

ペレのこの考え方がよくわかる建築の事例を1つ取り上げてみましょう。1925年のパリ装飾博覧会のパヴィリオンとして設計された「アルベール・レヴィ館」です。この建物は、スパンを思い切り飛ばした鉄筋コンクリート梁が架けられています。このパリ装飾博覧会自体が、これからの鉄筋コンクリート建築のための装飾を考えるという趣旨で開催されたものでしたので、仮設とはいえ鉄筋コンクリートの梁を誇示するのはもったもなことだったはずですが、ところが、です。柱に目をやると、それは生の樹皮がまだついたままの樅木の丸太です。樅木の丸太柱の上に鉄筋コンクリートの梁を載せるのは、現代の構法では合理的だとは考えられません。ケネス・フランプトンも、ペレの鉄筋コンクリートには木造へのリファレンスがあることを論じています。^(注2) 原始の小屋の木造から始まり古代ギリシャ建築を経て、鉄筋コンクリート建築の未来があることを、ペレはこのパヴィリオンで表現したかったのです。パリ装飾博覧会でもう1つペレ



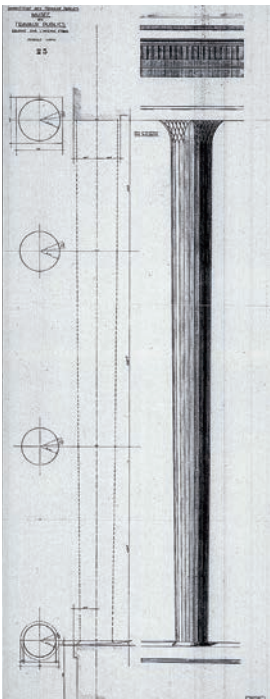
パリ装飾博覧会劇場外観
Roberto Gargiani, *Auguste Perret*, Gallimard, 1994, p.124.

は劇場を設計していますが、その建物の柱もまた、樹皮はついていませんが樅木の柱が採用されていました。

ペレ・オーダー

ペレはこうして、西洋建築の起源から現在までの歴史を統合して、鉄筋コンクリートによる新しい建築を生み出そうとしていました。ペレによる歴史を統合する鉄筋コンクリート建築の設計方法がよくわかるのが、ペレの鉄筋コンクリート柱の形式です。古代ギリシャ建築は、切石を積み重ねて柱をつくっていました。柱の切石どうしはあいだにダボを入れてずれないようにしていましたが、柱と楣のあいだは、載せているだけでしたので、現代的な構造力学の言葉を使えばローラーに近い考え方でした。そのため古代ギリシャ建築の柱は、柱基が太く、柱頭が細いプロポーションをしていました。

ペレは古代ギリシャ建築を引き継ぐことを強く意識していましたから、列柱の構成を好んで用いますが、切石



土木事業博物館柱詳細
Roberto Gargiani, *Auguste Perret*, Gallimard, 1994, p.163.

で作られた古代ギリシャと鉄筋コンクリートとは、特に柱の形状に違いを設けるべきだと考えました。鉄筋コンクリートでは、コンクリートは石と同じく圧縮のみに耐えられる物性ですが、鉄筋が引っ張りに耐えてくれるという利点があります。そのため、鉄筋コンクリートの上部構造は一体成形で固められるわけです。そのため、ペレは鉄筋コンクリートの柱の柱頭部分を太くして剛接合として曲げモーメントに抵抗させ、建物の一体性を強調しました。その代わりに柱基は細くして、ピン接合にしました。地面と

の接合部をピン接合にすることで、上部構造の一体性がより強調されると考えたのです。この柱頭が太くて柱基が細い柱の形式は、ペレ・オーダーと名付けられました。

ヴィオレール＝デュクスのゴシック構造解釈

前回第3回のこの連載では、ヴィオレール＝デュクの弟子の中世ゴシック建築保存修復家アナトール・ド・ボドーが最初の鉄筋コンクリート建築を生み出したことを取り上げました。ヴィオレール＝デュクとド・ボドーはともに、中世ゴシック建築が、切石組積造であるにもかかわらず、まるでやじろべえのように均衡のバランスをとって設計されていると考えました。この考え方は、現代からすれば間違っていると言わざるを得ません。圧縮にしか耐えられない石が引っ張りにも耐えられると考えなければ、やじろべえの均衡を保つことはできないからです。しかしこの均衡と弾性の原理は、驚くほど多くの読者と賛同者を生み出していきました。ペレもその一人でした。子どもの頃からヴィオレール＝デュク中世建築事典を読みこなしていたペレは、ヴィオレール＝デュクのゴシック構造解釈に大きな影響を受けていました。柱頭を剛接合にして柱基をピン接合にしたペレ・オーダーの考え方は、まさにヴィオレール＝デュクの均衡と弾性の原理の適用に他なりません。鉄筋コンクリートの鉄筋が引っ張り材として役割を果たすことによって、ヴィオレール＝デュクの均衡と弾性の原理は正しく応用されていくことになりました。ゴシック建築の構造原理に関するヴィオレール＝デュクの解釈は、誤解に過ぎなかったわけですが、その誤解が後の新たなイノベーションを生み出していったことに注意を喚起してみたいと思います。

ペレに限らずヴィオレール＝デュクの均衡と弾性の原理は、他にも近代建築のマスターピースを生み出しました。フランク・ロイド・ライト設計のジョンソンワックス社ビル。そのマッシュルーム・コラムです。マッシュルームの笠を思わせる無梁版に柱頭をハンチさせた柱。次第に細くなる柱基は、真鍮の金物で強調されたピン接合になっています。ライトの建築は有機的建築というキーワードで有名ですが、その有機的という言葉はヴィオレール＝デュクからの引用でした。こうして初期の鉄筋コンクリート建築は、歴史への参照の中から生まれてきたのでした。

〈注〉

- 1: Auguste Perret, *Contribution à une théorie de l'architecture*, les Éditions du linteau, 2016. 日本語訳は著者によるもの。
- 2: Kenneth Frampton, *Studies in Tectonic Culture: The Poetics of Construction in Nineteenth and Twentieth Century Architecture*, MIT Press, 1995. 松畑強、山本想太郎訳『テクトニック・カルチャー：19-20世紀建築の構法の詩学』TOTO, 2002年

「建築」の伝え方



会田友朗

職能の拡がりとは〈建築からの撤退〉か

「今、起きていることは建築家達の〈建築からの撤退〉とは言えないか？」

昨年、別府での建築家大会の10支部合同企画「注目の若手建築家による建築討論」シンポジウムにおける、モデレーターの畑友洋氏による投げかけが印象に残る。15人の登壇者の発表は、施設運営やまちづくりへの参画、自ら行うリノベーション等、設計を超えた多様な活動に溢れ刺激的だった。会場は、磯崎新設計のピーコンプラザ。1970年代の磯崎による〈都市からの撤退〉宣言を引用しつつ、氏は、職能の拡がりはその半面、建築自体からの撤退ととらえられはしないか、と会場に問うた。

〈撤退〉でないならば、今の時代にふさわしい新しい建築言語は発明されているか？(されているべきだ)、と畑氏は続けた。若い世代への愛ある叱咤激励である一方、一般に好意的に受け取られている現象の背後にある、ある種の状況への危機感の表明だったように思う。そしてそれは、建築家だけではなく、発注者を含めた社会経済環境に向けての言葉でもあったのだろう。

翌日のメインシンポジウムでは、重松象平氏が建築家の〈企画力〉という言葉で、今日の建築家は、グローバル経済やテクノロジーの進化の中で、先を読み提案する力を持つべきと論じた。世界でも先駆者であるOMA/AMOで活躍する建築家の言葉だけに説得力があったが、建築家の職能の拡がりに関心を抱き、過去に『Bulletin』で年間特集を組んだ者としては、畑氏による問題提起がとりわけしりと響いた。〈拡張〉が〈拡散〉とならぬよう、建築をつなぎとめるもの、建築がつなぎとめるものは何か、考えなくてはいけないと思う。今年の千葉大会では、議論がさらに深まることを期待している。

建築家の活動をいかに社会に発信するか

2016年にJIAに入会してまもなく、支部の広報委員となって以来、『Bulletin』編集長、本部の建築家PR動画推進WG主査、本部広報委員等を担い、今年は千葉大会の実行委員会・広報部会長として、準備にあたっている。僕にとってはJIAでの活動の大半を、広報関係に費やしてきたことになる。

建築家PR動画推進WGでは毎月1回、2年間で25以上のWGを行ってきた。本部や九州支部のInstagramにアップされている別府大会での動画記録もその一つの成果だ。僕もADのような立場で撮影を手伝ったが、大会中インタビューを快く受けてくださった方々に大変感謝している。

その強力な情報拡散力ゆえに、炎上、ファクトチェック、エコーチャンバー現象等、良くも悪くも話題のつきやすいSNSであるが、今日、建築家がいかに自ら活動を社会に発信していけるか、は大きなテーマである。新しいメディアを駆使し独自の発信を続けている若い世代の建築家も多い。JIAでも、ここ数年、ウェブサイトやSNSのために、従来型の竣工写真とは異なる、〈活動〉の様子が写る写真の収集をあちこちで呼びかけているが、これがなかなか難しく試行錯誤が続いている状況だ。基本的に動かない建築と異なり、人間や活動を写し込むにはタイミングなど撮影技術面で別の難しさがある。また、コンプライアンス重視の社会状況の中、肖像権等の権利処理をどうするか課題も尽きない。

ここで、前段で述べた職能の拡がり、「活動が写る写真」が求められている状況は、パラレルな事象であることに気づく。旧来の竣工写真の論理と、フィールドが拡張し、社会に開かれた活動の場や活動自体をも設計する建築家が、発信していく論理は少し違うのかもしれない。ネットの速報性と、建築の設計から竣工までという長い時間とのギャップもある。メディアの特性が〈設計〉に与える影響や、メディア発信を意識した設計への賛否等、建築家の〈広報〉について考えることは尽きない。AIの急速な進歩を前に、建築家が「どんな人たちで」「どんな活動をしているか」を社会に広報することは、JIAの重要な使命だ。建築家の広報について考えることは、職能としての建築について考えることに他ならない。

昨年から2年間にわたり連載を担当し、早いもので今回が全8回の最終回である。読者のみなさまには、毎回方向性もばらばらの拙いエッセイにこれまでお付き合いいただき大変感謝しています。ありがとうございました。

地盤調査不足による 設計上の問題について



榎本・藤本・安藤
総合法律事務所
弁護士
安藤 亮

建築プロジェクトにおいて、地盤調査は非常に重要なプロセスです。地盤調査の不足や不適切な調査が行われると、建物の安全性や耐久性に深刻な影響を及ぼし、法的なトラブルに発展する可能性があります。

今回はこの問題について詳しく説明します。

地盤調査不足による典型的な問題

地盤調査が適切に行われないと、次のような問題が生じる可能性があります。

- ① 不同沈下 (建物の一部が不均等に沈む現象) が発生し、建物に亀裂や傾斜が生じる
- ② 地盤の強度を過大評価した結果、基礎が崩壊し、建物が不安定になる
- ③ 地下水位の調査不足により、地下室や基礎部分に浸水が発生する
- ④ 予期しない地盤の液状化が発生し、建物の安定性が失われる

●地盤調査不足が法的トラブルに発展するケース

設計者や施工業者の過失として、建築主(施主)から損害賠償を求められることがあります。特に、地盤調査が不十分なまま設計を進めた場合、設計者が責任を問われることが多いです。実際、私が携わった案件でも、不同沈下が起きてしまい、地盤調査会社の地盤改良の工法選択の適否をめぐる長期にわたって訴訟で争われたものがあります。地盤沈下は地中の問題で原因を特定するのが難しいこともあり、訴訟になった場合は相当長期化することが多いと思われま

設計者が取るべき法的リスクの回避策

地盤調査会社の調査結果に基づく設計を行う際、設計者には合理的な注意義務が求められますが、地盤調査そのものの専門知識までを要求されるわけではありません。それでも、トラブル時に備えてリスクを回避・最小化するために、設計者は以下の対応策を取ることをお勧めいたします。

●地盤調査報告書の精査と確認

地盤調査報告書は、基礎設計の重要な資料です。設計

者は、報告書の内容を適切に理解し、合理的に精査する必要があります。項目としては、①地盤の支持力と強度の数値が設計上の基準を満たしているか、②地下水位や液状化のリスクなど、建物に影響を与える要素が適切に考慮されているか、③調査結果が現場の地形や地質の一般的な傾向と矛盾していないか、などを確認すべきでしょう。

また、異常に高い支持力や異常に浅い地下水位など、過去の経験に照らして不自然な値が示されている場合には、調査会社に追加の説明や再調査を求めるべきです。地盤が異なる複数の層から構成されている場合に、一部の層についての調査が不足していると感じた場合も指摘が必要です。

●調査会社への問い合わせ

報告書の内容に疑問がある場合、設計を進める前に調査会社に詳細を問い合わせ、書面で回答を得ておくべきでしょう。

●設計段階でのリスク共有と説明責任の履行

設計者がリスク回避を図るためには、施主や関係者に対する適切な説明と情報共有が不可欠です。施主への説明としては、地盤調査結果に基づく設計の方針やリスクについて、施主に対して事前に十分な説明を行い、書面で合意を得ておくことが重要です。

例えば、「液状化のリスクがゼロではないため、基礎の補強を行う必要がある」といったリスクを明確に伝え、追加コストが発生する可能性を理解してもらうなどが考えられます。

●記録の保存

地盤調査会社からの報告書、施主への説明資料、メールのやり取りなど、設計の過程で得た情報や判断の根拠を記録しておき、後日の紛争時に備えることが重要です。

設計者は、施主との関係では設計全体に責任を負う必要があることを改めてご確認いただいた上で、上記の対応策を講じることで、万が一トラブルが発生した際にも、設計者としての責任を最小限に抑え、プロジェクト全体の安全性と信頼性を確保していただければと思います。

大海原に小舟で漕ぎ出す



彦根 明

幼稚園に通っている頃、隣の家に大工さんが住んでいた。高度成長期にあって、空地が次々と家が変わっていく中、ちょうど自宅の目の前の空き地に隣の大工さんが家を建てはじめた。槌音が止んだ休憩時間、中に入ってみると手招きされ、つくりかけの骨組みの見える空間でお茶とお菓子をいただいた。秘密基地を遥かに凌ぐ興奮のひとつきだった。大工さんになりたい、という思いから高校に上がる頃には建物や空間をデザインする別の職業があることを知り、建築家を目指すようになる。理系選択で固めて3年生になったとき、担任の一言で藝大建築科の存在を知る……それはなんと魅力的な進路だと思ひ、理系授業の時間を削って絵や立体造形の勉強をした。

大学に入ると改めて自分の無知に気付かされることになったが、バブル前夜の世の中には設計事務所のアルバイトがたくさんあった。日建設計、日本設計、吉村事務所、内井事務所と、さまざまなバイトを続ける中で、磯崎アトリエでは全く別の感覚の体験が待っていた。「ロサンゼルス現代美術館」が完成し、バルセロナのメインスタジアムの工事をしていた頃で、たて続けに国際コンペに呼ばれ、海外の錚々たる建築家たちを相手に作戦を練る仕事の一端を垣間見ただけで、なんとかここに身を置いてみたいと思うようになった。磯崎さんが、さまざまな事象を受け止めて、考え、ものごとを構築するプロセスにはいつも鳥肌が立つ思いがした。在籍中は「ディズニー本社ビル」「水戸芸術館」といった巨大プロジェクトのお手伝いもたくさんあったけれど、メインは比較的小さな「立山博物館」や木造の「ハラミュージアムアー

ク」「湯布院駅舎」などに関わらせていただいた。アルバイトで学部2年から大学院まで頻繁に呼んでいただいたが、実際に所員として勤めたのは3年と少しだけで、かなり早めの28歳で独立することになる。

ちょうどバブルが終わるところで、独立後はじめにいただいた仕事の工事費総額が8億円という大きなものだったが、次が5億円、その次が2.5億円ときて、なんとその後が2000万円の住宅だった。はじめての木造住宅……本で必死に学びながら設計し、図面を描いた。その家が完成すると、テレビや新聞、雑誌など実に30を超えるメディアで紹介していただき、しばらくは住宅の設計依頼も続いた。とはいえ、住宅中心の設計事務所は自転車操業と呼ぶに相応しく、いつでもギリギリの低空飛行をしている感覚である。何度も事務所が消滅しそうになりながら、10年ほど経つ頃にほんの少しだけ安定して仕事が続くようになってきた。それでも大海に浮かぶ小さな舟……バブル崩壊、阪神・淡路大震災、9.11、姉齒事件、リーマンショック、東日本大震災、コロナ禍、ウッドショック、ウクライナ侵攻、円安、価格高騰……数えきれない大きな波に襲われることになったけれど、舟が小さすぎて波に乗ってしまい、船体に対する衝撃にはならない、というようなこともあった。

独立して設計事務所を経営するということは、まさに大海原に小舟で漕ぎ出すような感覚である。決して頑張れば誰でも上手くいくわけではないけれど、もし何か目指すものがあるのであれば、目標に向かって前を向き、ひたすら漕ぎ続けることを恐れずに挑戦してほしいと思う。



初めて依頼を受けた「SILVER WING」(JIA25年建築選/建築士会連合会賞/他)



温泉建築家になりたいと思ひ続け完成した「雲仙宮崎旅館」(グッドデザイン賞2023)

「時間」と「空間」の再構築



志村秀明

近代化が世界中に広がり始めた19世紀中頃、カール・マルクスは「時間」が「空間」を絶滅すると予見した。それから150年以上が経過したわけだが、近代化は人々に快適な生活をもたらしたかもしれないが、確かに「空間」をめぐる失われたものは多い。20世紀末からのインターネットの普及によって加速したグローバル経済は、世界中どこに行っても同じような景観(俗景観、コピペ景観)を生み出している。一方でこの「フラット化する世界」では、SNSの情報発信力と社会に対する影響力が強まり、ローカルがグローバルな力をもてるようになった。ローカルとグローバルが互いに触れ合うようになった近代化の局面が、21世紀の四半期を過ぎた今日であろう。そのような局面は「再起的近代化」とも呼ばれている。

再起的近代化の時代、相変わらず「時間」は「空間」を絶滅し続けるのだろうか。その鍵を握る一つの分野が、「空間」に直に働きかける建築や地域デザインなのだろう。建築や地域の「空間デザイン」だけではなく、「時間のデザイン」でもなければならない。人々によって受け継がれてきた社会的な記憶(空間と時間)を持続可能なものにする「過去から未来にかけてのパースペクティブな視野」と、ローカルという部分とグローバルという全体をひとつながりに把握する「魚眼レンズ的な視野」をもち、学術的領域と実践的領域を行き来しながら取り組んでいきたい。具体的な取り組みとして、日本建築学会編『グローバル時代の景観デザイン』(鹿島出版会、2025)や、東京都中央区佃での「旧飯田家住宅保存活用プロジェクト」にご注目いただけると幸いである。



佃島旧飯田家住宅の正面外観

モノをつくり、コトをつくる



繁田尊友

独立して6年になります。現在、工学院大学の「K×Kプロジェクト」に携わっています。多摩産の木材を使用して小規模な小屋を建て替えるというもので、学生たちと毎年1棟完成させています。学生時代に建物を建てる機会があれば良かったという思いから、当プロジェクトでは学生に設計だけでなく現場代理人にもなってもらうことで建築しています。

学生たちには「古来から人間は建築を建てている。重機も電動工具もない時代に人力だけで先人達は建ててきたのだから、現代の私達にも可能なはずだ」と啖呵を切っただけで着工しました。しかしながら、現実には厳しくスコップ片手に根切ったものの、火花が出るほど地面は固く、つるはしも何の役にもたちません。電動工具は解禁とし、工事は何とか前進しましたが、私も測量から勉強し直すこととなり、毎日理論と実践の繰り返しとなりました。

実際工事してみると分かることですが、生コンや鉄筋は重く、コンクリートは硬い。木は柔らかいし反っている。学生たちも普段設計している図面から読み取れないことがたくさん発見できたようです。

学生との工事は1回きりの予定でしたが、「今年もやりたい」と熱望する若者を無視するわけにもいかず、今年からは職人と協働ですが、建築中です。

小さい倉庫の建て替えですが、モノづくりを通じて、彼らに残る、大きなコトづくりをしているのかもしれない。このたびのJIA加盟を契機に、モノづくりだけでなく、その先のコトにも積極的に参加できるよう取り組んでいきたいと思っています。



K×Kプロジェクト
学生たちと完成した小屋の前で

交流委員会 Aグループ

建物見学会

— キューピー「マヨテラス」を見学 —



交流委員会
Aグループ
東洋テクノ
平山智恵

2024年9月10日、東京都調布市にあるキューピー株式会社の複合施設「仙川キューポート」内にある「マヨテラス」を見学しました。総勢16名で約1時間見学をし、終了後は懇親会へ。楽しい一夜となりました。

さて、「仙川キューポート」（設計：日建設計、施工：大成建設、2014年）は、地下1階、地上5階のオフィスビルで、第16回日本免震構造協会賞作品賞を受賞されています。建物平面が六角形なのが特徴です。

外観には三角形のアウトフレーム。どこかで見たことあるようなこちらは、キューピーマヨネーズの袋にプリントされた模様になっています。ただ模様を模したわけではなく、鉄の板とコンクリートの素材からなるひし形の格子は、建物を支える免震構造を担っています。外側で荷重を支える分、1フロア約6,000㎡という室内は柱や壁が少なくすみ、広い視野が開けた空間となっています。

同時に仙川キューポートは、首都圏に点在していたグループ会社等17事業所と研究施設部門および本社機能を有する事業所も入居していることから、BPC対策が必要不可欠であり、耐震性の高い建物を実現しています。

グループ各社間のコミュニケーションを活発にするオフィスを目指し、研究室階と執務室階を交互に重ねる「ミルフィーユ構造」になっており、六角形のフロアは現在地がわかりにくいこともあり、エリア分けされ、表示板の色分けなど、各所に工夫がなされています。



仙川キューポートの外観

当日は15時に京王線「仙川駅」前に集合し、仙川キューポートまでは徒歩7分程度。若干1名が「仙川駅」と「千川駅」を間違えるというハプニングもありました……。見学会はキューピーの方の案内で開始。マヨテラス部分は予約をすれば無料で見学できます。

見学エリアは、ホームページに掲載の通りです。

1. サラダホール
2. ファクトリーウオーク
3. マヨネーズドーム
4. キューピーギャラリー
5. キューピーキッチン

マヨテラスは工場ではなく、研究所やオフィスに併設されている見学施設になっています。そのため、実際に稼働している工場ラインを見るのではなく、キューピーマヨネーズの歴史やおいしさのひみつなど、映像等で丁寧にまとめられたものを見学します。

工場では1分間で600個の卵を割っていくことや、材料の卵は黄身はもちろん、白身、殻、カラザなどに分けて、すべて無駄なく使い切る、こんなことを学ぶことができます。お子さんの夏休みの自由研究に向いていそうです。

最後にキューピーマヨネーズを使ったポテトサラダを試食させていただき、見学ツアー終了後にはおみやげも。無料の見学ツアーで太っ腹過ぎます。

大人だけのグループは私たちだけでしたが、最後まで楽しく見学できました。お近くの方はぜひ一度行ってみたいかがでしよう。大人の工場見学、おすすめです。



見学会参加者で記念撮影

交流委員会 Fグループ

施設見学会と懇親会を開催

—体験型ショールーム「PS モンスーン」—



交流委員会
Fグループ
ピーエス工業
有本健彦

快適な室内気候を体験

交流委員会Fグループでは、2024年8月29日に東京都杉並区にあるピーエス工業の体感型ショールーム「PS モンスーン」の見学会を開催しました。

ピーエス工業は、産業用加湿器と除湿型放射冷暖房機を軸に製造販売している会社です。ショールーム「PS モンスーン」は築年数55年の建物ですが、2020年に大規模改修を行いリニューアルし、ピーエス工業の加湿器、除湿機のほとんどすべての製品の実機と運転デモを見ていただくことのできる施設です。

見学会の前半はプロジェクターを使用して、会社の紹介やショールームの紹介、製品の概要を説明し、後半は実際にショールーム内の製品を見ていただきながら説明をしました。

除湿型放射冷暖房については、体感型ショールームということもあり、夏の除湿型放射冷房での快適な冷房環境を体感していただくことができます。皆さんには、結露水をまといながら冷房している製品を、とても興味深く見ていただけました。その中でも、特に製品の特徴や、実際の使われ方として、ZEBへの貢献や健康・快適性の向上については、実例を交えながら具体的にお話しさせていただきました。

加湿器関連については、さまざまな方式の加湿器の運転状態を見ていただき、それぞれの仕組みや特徴を説明。他にないものとして、加湿・除湿のハイブリッド製品と、気化・細霧式ハイブリッド加湿器は特に時間を使って説明し、運転状態を見ていただきました。

約2時間かけてショールームを案内し、途中皆さんから質問やご意見もいただき、大変有意義な機会となりました。

残暑の中の見学会で、帰る頃にはちょうど夕立ちのタイミングと重なってしまい激しい天候の中の開催でしたが、ショールーム滞在中は終始快適な冷房環境の中で過ごしていただけたと思います。

懇親会でグループ内の交流を深める

見学会を終えたのち、新宿の銀座ライオンに場所を移して懇親会を行いました。日頃の疲れを労いながら、激しい夕立ちの中での移動だったこともあってか、大いに盛り上がったように感じました。見学会の感想を話してくださる方もいましたし、改めてFグループ内の各社を紹介する時間もあり、よりいっそう交流を深めることができました。



見学会の様子



銀座ライオンでの懇親会

「JIA公開エスキス会」を開催しました！

学生と建築家、交流委員会の皆様で同じテーブルを囲む、
これまでにない「JIAらしい」エスキス会



学生の会
@joint 副代表
東京大学修士2年
井筒悠斗

関東甲信越支部 学生の会@jointでは、
昨年10月25日に「JIA公開エスキス会」
を開催しました。参加者は学生5名(う
ち発表者3名)、JIA会員10名。初めて
の企画でしたが、軽食やワイン片手に、
JIAらしく参加者同士のフラットな交
流ができました。

バリエーションな学生発表と共に

会は、学生代表の伊藤の開会挨拶、
共同代表の野村による乾杯から始まり
ました。発表は3名が担当し、それぞ
れが熱意あるプレゼンテーションを
行ってくれました。

1人目は、大学院1年生の野村月咲さ
んによる集落調査に関する発表。議論
は世界中の集落の価値へと広がり、活
発な意見交換がなされました。

続いて、3年生の谷倅多さんから都
市計画に関する発表。北千住を対象地
としたプランは、宿場町としての歴史
や現代の文化的多様性を取り上げ、建
築家の視点からも興味深いディスカッ
ションが展開されました。

最後に、卒業設計に取り組む4年生
の佐藤風香さんが「映画と階段と建築」
をテーマに発表。地下鉄の階段を舞台
としたモンタージュによる空間体験の
表現について、議論が繰り広げられま



建築家クラブにて、1つのテーブルを囲いエスキス会

した。特に建築家やメーカーの方々か
らの多角的な意見は、学生にとって貴
重な学びとなりました。

「JIAらしさ」を表す恒例行事に！

参加者同士が同じテーブルを囲み、
学生の発表を中心に意見を交わすとい
う「JIAらしさ」を体現した会となりま
した。準備段階では参加者の数が思う
ように集まらず焦りもありましたが、
当日は皆様のご協力で大いに盛り上
がり、楽しい時間を共有できたと感じ
ています。今回の反省を生かし、来年は
より多くの方にご参加いただけるよう
、そして「JIAのビッグイベント」の1つ
として定着させるべく、引き続き努力
してまいります。

結びに、ご参加いただいた皆様、準
備に関わってくださった方々、そして
発表を引き受けてくれた学生に、この
場を借りて感謝申し上げます。今後も
ぜひ、@jointの活動に温かい目を向け
ていただければ幸いです。

興味がある方、知り合いに学生がい
らっしゃる方は、joint@jia-kanto.org
またはInstagram (@joint.jia) までお
気軽にお問い合わせください！



開会の挨拶をする @joint代表の伊藤

発表者の感想

初めての試みとなる会で、1つの枠組
みにとらわれずさまざまな視点で意
見が交わされ、刺激的な時間となり
ました。集落の話からさまざまな方
向に話が広がり、JIAだからこそでき
る会であると感じました。

野村月咲 (日本大学修士1年)

私は今回初めてJIAのイベントに参加
させていただき、最初はとても緊張
していましたが、JIAの会員の皆さま
が柔らかくお話ししてくださり、卒
業設計へのとても貴重なご意見を
いただくことができました。

佐藤風香 (日本大学4年)

学生数名とそれを超える人数の大人
の方たちに囲まれながらのお話は、
とても有意義でした。普段のエスキ
スと違い、他大学・他学年の学生の
意見ももらえて、ラフな雰囲気なこ
ともありすごく楽しめました。これ
からもさまざまな活動を考案、参加
したいです。

谷 倅多 (東京電機大学3年)



今回の「JIA公開エスキス会」のフライヤー

支部サイトの「JIA公開エスキス会」
報告もぜひご覧ください▶



スキー同好会

「スキーが趣味です」と言うと、「お元気ですね」という反応が返ってくるが多くなりました。でも内心では「この爺さん大丈夫かな」と思っているに違いありません。この正月で72歳となりました。

生まれも育ちも雪国新潟ですが、我が家は越後平野のど真ん中。スキー場は子ども同士で行ける距離になく、子どもの頃からスキーに親しんでいた仲間は周りにはいませんでした。スキー場デビューは社会人となってから。会社の先輩に無理やり連れていかれ、リフトに乗せられ山頂で勝手に降りてこいと放り出されました。急なコースを滑るというより転び落ちながら必死に下りてきました。50年も前の話です。

今では地元の仲間とスキー同好会を作り、年4回はスキー場に行こうと励まし合っています。何しろ会長が75歳、メンバーのほとんどが年金暮らし。腰の曲がった会長は若い女性の前でわざと転び、心配した相手と一緒にリフトに乗って、降りると心配顔の女性の前でさっそうと急斜面を滑っていく。嘩然としている女性を見ながら、メンバーはまた始まったと苦笑いです。

八海山山頂スタート場所にて
右端が筆者



そんな笑い話を地域会の忘年会の席で披露したら、JIAスキー同好会ができました。会員同士、普段は顔を合わせていても趣味の話をしたことはありません。一昨年のは、正会員6名、協力会員2名の8人が参加。小さい頃からスキーを履いていた強者ばかりで、経験が一番長い私が一番下手なところが笑えます。全員の技量が分かったところで、2回目の昨年は急斜面で有名な八海山スキー場へ。中腹はガスがかかり憎いのコンディションでしたが、山頂から雲海に飛び込んでいくスキーはスリリングでした。雪不足で上の急斜面しか滑れず、安全にゆっくり滑ろうと思っていましたが、いざ滑り出すと周りの人には負けたくないと、年甲斐もなく飛ばしてしまいます。何とか降りてきましたが、日ごろの運動不足がてきめんで、全身筋肉痛で3日間足を引きずっていました。

今年は雪もたっぷりあります。次の計画が楽しみです。

(平原 茂)

支部総務委員会からのお知らせ

支部役員選出時の広報や選挙、支部総会の招集は、2025年度以降「メール等の電磁的方法」で行います

2024年度は支部役員選出時の広報や選挙、支部総会の招集は文書での「郵送」に加えて、「メール等の電磁的方法」で発信します。2025年度以降は、基本的に「メール等での電磁的方法」のみに移行します。ご理解ご協力のほどよろしくお願いいたします。

なお、会員の皆様に電子メールが確実に届くよう、電子メールアドレスの変更は必ず事務局までご連絡いただきますようご協力をお願いいたします。

編集を終えて&年度末の行事

- 久々に「抱負を語る」の人選を担当。個性的な活動に元気をもらえます。(小倉)
- 編集長として最後の号となります。皆様ありがとうございました!(関本)
- オフィスも大学も“評価”の時節。1年で最もエネルギーを使います。(渡辺)
- 渡邊支部長、情報錯綜した中ご執筆ありがとうございました!(永峰)
- 6年間の広報委員会、良い経験でした。ありがとうございました。(望月)
- 「これから」を歴史から紐解いてみたいと思いました。空を掴む私の依頼に鋭い原稿を寄せていただいた松隈先生に感謝。(大塚)

編集後記

- オペラハウスを訪れる機会があり、色褪せない建築と技術に感銘を受けました。(杉本)
- 何気に年度末の慌しさが、年末同様に恒例行事化している模様。(竹内)
- 久しぶりの海外出張。アワード審査でいろいろ刺激を受けました。(小山)
- 鈴木実さんのレポートからオーストリアの恵まれた、優雅でシビアな面もある生活環境を知ることができました。(佐久間)
- 今期のリレー式の特集号、皆様のおかげで充実した誌面になりました。(田口)

〈2024年度『Bulletin』特集担当者〉夏号：市村宏文、秋号：佐久間達也、冬号：小山光、春号：大塚浩子

編集：公益社団法人日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会

委員長：田口知子

副委員長：関本竜太

委員：望月厚司・竹内祐一・佐久間達也・大塚浩子・磯野智由・小倉直幸・小山光・永峰麻衣子・渡辺猛・杉本憲治

編集長：関本竜太

副編集長：佐久間達也・小倉直幸

編集ワーキングメンバー：広報委員+市村宏文・中澤克秀・会田友朗・野村月咲・伊藤綾香・知見徹摩・立石博巳

編集・制作：南風舎

Bulletin 303 2025 春号

発行日：令和7年3月15日

発行人：大西摩弥

発行所：公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館

Tel: 03-3408-8291(代) Fax: 03-3408-8294

印刷：株式会社 コラボ

■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧

・(公社)日本建築家協会 (JIA) <https://www.jia.or.jp/>

・JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

©公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部 2025

ユニオンは
アートウェアを通して、
地球と人類の未来を拓く
ものづくりを行います。

私たちユニオンは、創業からずっと、
持続可能な未来の在り方を見つめ、ドアハンドルを
“アートウェア”と呼べる領域にまで高めてきました。
そして現在、葡萄を絞り終えた皮から成るレザーのように、
廃棄物を新しい素材と捉えるなど、リサイクルにとどまらない、
より豊かな未来を拓くものづくりへの挑戦を続けています。
時代がどのように大きく変化しようとも、
私たちはこれからも地球基準のアップデートを重ねていきます。
アートウェアの本質を、変えることなく。

株式会社ユニオン

【本社・大阪支店】 550-0015 大阪市西区南堀江2-13-22 tel 06-6532-3731

【東京支店】 135-0021 東京都江東区白河2-9-5 tel 03-3630-2811

【名古屋営業所】 454-0805 名古屋市中川区舟戸町3-20 tel 052-363-5221

UNION
ARTWARE